
棺のクロエ 2 超高度漂流

義忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棺のクロエ2 超高度漂流

【Nコード】

N2433M

【作者名】

義忠

【あらすじ】

<同盟>への亡命を企てるホアン・フリー博士の身柄を拘束するため超高度のジェット気流圏に行く豪華客飛行船<アリーズ>に乗り込んだ<帝国>陸軍諜報員ヒュー・タム少佐達は、博士と行動を共にする「クロエ」と名乗る少女と出会う。

難なく博士の身柄を確保した少佐たちだったが、<アリーズ>は謎の部隊の襲撃を受ける。超高度の上空を舞台とする機械幻想第2弾！

マシーナライ・ファンタジー

1 (前書き)

前作『棺のクロエ1 棺と少年』に引き続きの「クロエ」の物語

ですが、今度の主人公はゴスロリ美少女？

片腕サイボーグの軍人さんも登場し、超高度を漂流する巨大飛行船
内で壮絶なバトルが始まります。

是非、お楽しみください。

春を迎えた 帝都 は、甘やかな芳香を放って咲き誇る雪花が風に乗って舞う、一年でもっとも雅な季節みやびとされる。

500万を超える人口を擁するこの 帝都 を縦横に走る水路沿いに、無数に植えられた雪花の木。その枝にほころぶ小さな白い綿のような花びらが、南から吹く暖かな風にさらわれてふわりと浮かび、空高くに連れ去られる。

そこに住まう臣民が厳しい冬の間に伴侶とした分厚いコート脱ぎだす頃、 帝都 上空を覆う淡やかな雲の正体はこれである。

戦争が終わって五年目の 帝都 経済復興も軌道に乗り始めたこの年の春は、こうして例年と変わることのない穏やかな季節として始まりつつあった。

その遙か上空、7,000

帝都 上空に横たわり、 帝国 全土を東西に貫いて吹く高速気流ジェットのやや下に位置する高度に、巨大な飛行船が浮かんでいた。

それぞれ全長500を超す気囊部がふたつ、その下に、洋上を行く船舶であれば大型荷客船クラスのゴンドラが吊られている。

大陸横断船 アリーズ 高速気流ジェットに乗って数日で大陸を横断するこの船は、建造の段階から上空で行われ、地上に一度も降りることなく大量の物資や旅客を運ぶ。

こうした巨大飛行船が、 帝国 上空を常時、千隻以上は行き交っているのだ。

大陸国家である 帝国 にとって、大陸鉄道グラント・レイル、高速道路網グラント・トレイルと並んで重要な大量輸送機関である。

その アリーズ の後部接続扉に、地上から上つてきた小型の連絡船ヤトル といっても、いずれも全長100を超すものばかりで、地上のスケール観からすると十分に大きいのだが 从小型の連絡船ヤトル から伸びる連絡網ブリ

橋が接続する。

巨大なゴンドラが微かに震え、与圧確認終了のブザーが鳴って、乗務員がふたり掛りで分厚い隔壁を開く。

接続扉前のカウンターロビーに、連絡船シヤトルから乗り移る乗客が流れ込み始める。その奥では、ベルトコンベアーに載って乗客の手荷物が次々に運び込まれてゆく。

そこを流れてゆく大きな白い棺くわんを目にして、軍服姿の男は眉根を寄せた。

「……何だ、あれは？」

「帝都 で亡くなった方でしょうか」

「棺くわんに入っても乗船料金は一緒なのかね」

さして返事を求めるふうもなく呟くと、白手袋をつけた右手で胸元からシガレットケースを取り出し、自然な仕草で紙巻タバコを口にくわえる。

「船内は禁煙です、少佐」

「判ってるよ。くわえただけだ」

苦い表情で、渋々とタバコをシガレットケースに戻す。

気を取り直すように、制帽のつばの位置をわずかにずらす。その下から見える頭髮の長さは、とても前線勤務要員には見えない。彫りの深い、整った、というにはやや野趣のある顔立ちに浮かぶ笑みはふてぶてしく、そこには、どこかしら荒事に慣れた者特有の凄みが滲んでいた。

男はその不敵な面構えで、傍らに立つ同じく軍服姿のがつしりとした大男を振り返った。

「さて、軍曹。仕事の時間だ」

「はっ、少佐」

軍曹と呼ばれた男は、脇を絞った略式の敬礼で応える。見る者が見れば判る。戦時中、狭い塹壕の中で兵士達が好んで行っていた独特の敬礼の仕草だった。

ふたりは乗船検査を行っているカウンターへ向かう。

その先には白髪の老人が、孫とおぼしき黒髪の幼い少女を連れてカウンターを抜けようとしていた。地味ではあるが品の良いスーツに身を包んだ老紳士だ。その傍らで老人を気遣うように寄り添う少女は、長い黒髪を頭の両脇にオレンジのリボンでふたつに結わえ、黒いドレス姿で年の頃は10歳前後。歳の割には大人びた顔立ちだが、それだけに目鼻立ち美しく整っている感がある。ややきつめの瞳も大人じみた印象を与えていた。

と、その視線がこちらに向いた。一瞬、こちらを捉えてから、わざと外される。だが、その一瞬で、こちらの値踏みがざつと済まされたかのように視線が動いていることに少佐は気づいた。「子供らしい仕草」どころかこの業界の玄人じみた態度だった。

何だそりゃ。良家の娘然とした身なりだが、戦災孤児か何かか。しかし、戦地の孤児にありがちな、怯えを含んだ緊張はあまり感じられない。

そして何より、その瞳だ。

冷たい、と言うより、冷え込んだ印象を与える翳かげのある眼光ひかり。戦災孤児というより地下社会アンダー・グラウンド、あるいはこっちの業界の住人の匂いさえする。こんな子供にか？

可憐な人形のような外見と、それ以外の印象がことごとくちぐはぐで、見ていてひどく神経に引っかかる。

何にせよ、可愛げのないガキだな……だが、子供連れ？

「何か聞いているか？」

「いえ、地上からの報告では、博士はひとりで乗船されたと聞いています」

「ふむ……まあ、いい。後は本人に訊くさ」

軽く肩をすくめると、カウンターへと向かう。

老人と娘が乗船カウンターを向いたそこへ、声を掛けた。

「失礼、ホアン・フー博士でいらっしゃいますね」

「何か……？」

腕にすぎる少女からすでに何か吹き込まれていたのか、博士はさ

ほど動揺することなくこちらを見据える。

少佐は音を立てて踵を合わせ、ぴしりと見事な敬礼を行った。

「申し遅れました。小官は 帝国 陸軍技術開発本部四課のヒュー・タム少佐。こちらは従卒のゴラン・チュー軍曹です。」

講演先のレムサスまで博士をエスコートするよう、技研本部長より申しつかつております」

胸元から身分証明書（ID）を取り出し、博士の前で開いてみせる。

そこに張られたモノクロ写真と少佐の顔を見比べながら、博士は言った。

「……頼んだ覚えはないが？」

「そうとも伺っております」少佐はにこやかに微笑みながら答えた。「地上^{おか}ではいろいろ事情が変わっているようですね……。それは後ほどご説明致します。」

いずれにせよ、ここでこのまま立ち話と言うのもなんです。詳しいお話は船室で」

少佐は右手の指を鳴らし、軍曹に命じる。

「博士のお荷物を船室までお運びしろ、軍曹」

「はっ！」

軍曹が博士の大きな旅行鞆を軽々と担ぐ。

「では、参りましょう」

「……………」

先を促す少佐に、博士は苦虫を噛み潰したような表情でうなずいて歩き出す。

と、そこで黒髪の少女がその場に立ったまま、こちらを見ていることに気づいた。少佐は振り返って右手を差し伸べた。

「お嬢さん、あなたも一緒に」

「……………」

少女は白手袋をつけたその手をちらりと眺めると、小さく鼻を鳴らして口許をわずかに歪めた 目の前の茶番のくだらなさに失笑

するかのように。

このガキ……？

「クロエ！」

「ごめんなさい、お爺さま。大丈夫。今、参ります」

上品な仕草でぺこりと少佐に頭を下げると、するりとその脇をすり抜け、ふたつのおさげを揺らしながら博士のそばへと駆け寄ってゆく。

「……………」

そでにされて残された形の少佐は、無視された右手を眺めた。

「ふむ……一応、警戒されてるってことか……？」

と言うより、鼻で笑われたような感じだったが。

「まあ、いい啦」

子供の面倒を見る分まで、棒給には含まれてないだろうしな。

肩をすくめると、少佐もまた博士たちの後を追って歩き始めた。

帝都 からの乗客を下ろし、代わりに地上に降りる乗客を受け入れると、連絡船シヤトルは気密船舷橋を アリーズ から切り離して収納。いったん距離を取ってから地上へと降下を開始する。

帝都 周辺のおちこちの停泊所ステーションからやってくる何隻もの連絡船シヤトルを、こうやって朝からさばいていた アリーズ は、最後の連絡船シヤトルを見送ると、急速に黄昏へと染まりつつある茜色の空へとゆっくりと上昇してゆく。

アリーズ はこのまま高度一万二千まで到達すると、そこに流れる西向き的高速気流ジェットに乗って、一気に加速を開始するのだ。

「絶景、の一言に尽きますな」

一等船室の壁面一面を覆う分厚い気密ガラス越しに、茜色に染まる雲の絨毯を眼下に眺めつつ、少佐は背後を振り返った。

「いかがです、博士。めったに見られる景色ではありませんよ。ああ、お隣のお嬢さんもお呼びしましょうか」

子供には聞かせづらい生臭い話になる、と少女を隣の寢室に追い出したのは少佐の方である。理由は必ずしもそれだけではなかったが。まあ、何となくやりづらかった、と表現すれば概ね嘘ではない。

ソファアーに腰を下ろしたまま、博士は慥然と告げた。

「……君は技官ではないな」

「お判りですか」

「彼等も大概ずうずうしい連中だが、君ほどではない」

少佐は肩をすくめると、テーブルを挟んで博士の正面の席に腰を下ろした。軍曹は何も言わずに、腰に手を当ててドアのそばに立っている。

「お気づきの通り、技研の所属というのは偽装カバです。我々の本来の所属は、陸軍参謀本部特務第6課となります」

「スパイか……」

「近頃では諜報と呼ばれています」

「呼び名を変えたところで、本質は変わらん」

「ごもつとも」少佐は頷き、さらりと話題を変えた。

「ところで、レムサスでの亡命ですが、あれ、ダメになりましたよ」
「……………っ！」

博士の表情から一気に血の気が失せる。膝の上の拳を強く握り締め、動揺を必死で抑えようとするその姿は見事なものだったが、ここで手を緩める気はない。

「市内の 同盟 系スパイ組織が一斉摘発を受けましてね。武官もひとり、『好ましからざる人物』として追放されました」

「……………」
「かわいそうに。貴方がこんな時期に亡命なんて余計な事を考えるから、こんなことになる。ああいう微妙な土地で組織を作るのは大変なんです。私も以前、北の国境線の向こうでしばらくその手の仕事に嵌まったことがありますね。いや、もう、これがどいつもこいつも本当に身勝手な連中ばかりで」

「長いのかね、その話は？」

「いえ」少佐はあっさりと話を元に戻した。

「しかし、わが 帝国 が誇る機械生体学の祖にして泰斗たる博士が亡命をお考えとは…………。いや、正直、残念です。

実は私も大戦中の戦傷で右腕を機人化してまして」

少佐は白手袋をはめた右手を軽く掲げて見せた。

「博士の開発された技術のおかげで、こうして支障なくお国の務めを果たしている。常日頃から、機人技術を開発された方々には感謝の念を絶やしたことはない。本当ですよ。

とは言え、博士が逃げ出したくなるお気持ちも理解できなくもない」

「……………」

「グエン・キ参謀総長が今年になって二度目の入院 病名は公表されてませんが、たぶん心臓でしょう。軍内外の抵抗勢力を捻じ伏

せて 同盟 との停戦にこぎつけた、あの生ける伝説みたいな爺さまも寿命には勝てないってことです。

まあ、斬った張ったが当たり前前のこの稼業で、80過ぎの死ぬ間際まで現役なんですからご本人としては本望でしょう。ですが、残された側としてはその後のことを考えなくちゃならない」

元より建国以来、連面と続く数々の戦争によって国勢を伸長してきた 帝国 では、伝統的に軍の権勢が強い。戦争により国力を育くみ、戦争により富の再配分を行い、戦争への貢献をその公平さの基盤としてきた それが 帝国 なのだ。

そもそも近代産業社会にとって、徴兵制下の軍隊は強力な産業教育機関でもある。その支持層は貴族から市井の労働者まで、社会各層深くに及ぶ。議会も元軍人や軍関係の企業に支援された議員が多数を占めるため、軍の意向に反するような議案はまず否決される。

また 帝国 は大陸国家であるだけに、その軍内でもとりわけ陸軍の発言力が強く、陸海空の三軍を束ねる大本営統合参謀長の職は陸軍参謀総長が兼務することとなっている。

議会より選出される首相の権限は政務の補弼に限定されるし、皇帝への唯一の作戦奏上権者でもある。俗世の権力に限れば、事実上、帝国 の最高権力者といって過言ではない。

つまり2億の帝国臣民、1,000万の軍人軍属、500万の陸軍將兵を統べる人物が、もう間もなく変わろうとしているのだ。

「そこで、博士にはお話をお伺いしたいわけですよ、私達としては」少佐はにやりと笑って告げた。

「終戦の年、西方辺境領内に設けられたある研究施設が、爆発事故を起こして壊滅した。帝国 でも最優秀の機械生体工学の研究者が揃っていた研究施設が、跡形もなく吹っ飛んで生存者はなしたまたま 帝都 に出張中だった所長のあなたを除いて」

「……………」
「機人の研究をしていたはずの研究所で、何でそんな『爆発』が起きたのか。義手にボイラーつける実験でもやってたんですかね

しかし、まあ、いいでしょう。私たちが興味があるのは、そつちじやない。

私たちが関心を持つているのは、研究所を巡る金の流れの方です。完全に機械化された10箇師団　1箇軍を会戦1〜2回分の兵糧弾薬つきで新設しておつりがくる予算が、この爆発事故を境にきれいさっぱり消えてなくなっている。何ですか、これ？　機人開発には金が掛かるとはいえ、所詮は義手や義足の開発だ。こんなに金が掛かるわけではない。

参謀総長の肝煎りで、当初より軍の機人政策のブレーンを長く務め、機人技術を巡る軍産官学の協力体制を確立させた貴方なら、何かご存知なのではありませんか？」

「……………」
しばしの沈黙の後、博士は逆に訊ねた。

「……………ならば、君は何に使われたと思うのだね？」

「停戦工作の裏金」少佐はずけりと言つてのけた。

「帝国　も　同盟　も、いずれもこのまま戦争を続ける体力は残つてなかったにせよ、落としどころをどうするかにはそれぞれ言い分はあつた。そこをうまく丸めるのに、現金が派手に飛び交つていた　と、聞いてます。

まあ、その頃、私は前線でライフル抱えて砂まみれになつたので、この目でじかに目にしたわけではありませんが。

何にせよ、停戦工作なんて、表にできない金がいくらあつても足りるはずがない。

と、同時にその金の流れは、参謀総長の戦後の権力構造の仕組みとそのままリンクしていることも間違いない。それを押さえられるかどうかで、次期参謀総長の席を巡るレースの行方も違ってくる。

特務第6課^{ウチ}だけじゃありません。あちこちに隠れていた有象無象の輩^{やかいら}どもが、これを先途とばかりに動き出しています。

レムサスでのスパイ網の摘発もたぶんその一環でしょう。いや、そもそも、　同盟　が危険を犯してあなたの亡命を強行しようとし

たのも、機人技術絡みというより、次期参謀総長レースにコミットしようとしたのか、はたまた彼等にもよほど知られたくない話があるのか」

そこまで少佐が話したとき、ふいに鈴を転がすような笑い声が聞こえてきた。

「クロエ！」

「ごめんなさい、お爺さま」

隣室にいたはずの少女が、小さく舌を出す。目許には笑いすぎて涙まで浮かんでおり、それをそつと指で拭いながらクロエは博士に謝った。

「いや博士、小さなお嬢さんからすれば、くだらない大人の事情でしかありませんからね。まったく笑われてもしょうがない」

「ああ、ごめんなさい、少佐。そうじゃないの」猫のように瞳を細め、にっこりとクロエは微笑んで告げた。

「だって、何も判ってないんですもの、貴方」

「……何も、ですか？」

「そう。何もかも」

邪気のなさがかえって悪意を鋭くしているような表情で、クロエが頷く。

「クロエ！」博士が気色を変えて叱る。

「彼等を捲き込んでならん」

捲き込む？ 何の話だ。

「もう手遅れよ。こんな場所まで、のこのこ首を突っ込んでくるんですもの」

「博士」少佐は眼前の老人を振り返って訊ねた。

「何の話です？」

「……………」

博士はしばらく額を手で覆い、やがて苦くこぼすように口を開いた。

「……………君らが考えているような話ではないのだ。研究所の件も、私

の亡命も いや、そもそも我々が『機人』を開発させられた理由
自体……」

「開発させられた……？ 『機人』の導入は、戦争で生じた兵力不
足を補うために始められたのでは？」

「……違う。順番が逆だ」

「逆？」

何を言い出す気だ、この老人は。

「『機人』を開発するために、戦争が始められたとでも？」

「考えてもみたまえ。戦争が本格化するまで、私たちは電子制御技
術もそれを成立させるための精密加工技術も手にしていなかった。

人口筋肉や人口皮膚に使う高分子ポリマー生成技術、神経電位を電
気情報に置換するセンシング技術、筋肉の動きの制御に予測フィー
ドバック理論が必要なことも知らなかったし、脳の意識レイヤーか
らの情報を出力して外部機器アウトプットと繋げるデバイスなぞ夢にも思わなかった。基
礎理論すら、存在しなかったものも少なくない」

「それらの技術を確立するために、資本と人的リソースを集中させ
るお題目として『戦争』が利用された……まあ、よく聞く話です。

共和主義者が好んで口する陰謀論にありがちですね。しかしそんな
ものは、卵が先か、ニワトリが先かといった類たぐいの議論で」

「そんな次元の話をしているのではない」博士は少佐の台詞をさえ
ぎって言った。

「言つたろう。基礎理論さえ存在しなかった、と。元の発想すら存
在しなかったのに、確立もへつたくれもあるまい」

少佐は首を振った。

「よく判りませんね。天から技術テクノロジーが降ってきたとでもおっしゃりた
いんですか？」

「そうだ」と言つたら、君は信じるかね？」

じつとまっすぐに少佐を見据え、博士は告げた。

嘘をついているような目ではない。自身の奉じる学問に身命を捧
げた者のみの持つ、真摯で透徹した視線　つまり、真剣に頭の底

からイカレてるということか。

少佐は胸の裡で呻いた。

功なり名を遂げたその身で、地位も名誉も投げ打って急に亡命な
ど思い立つだけでも相当にイカレてるが、謀略史観どころか、こん
なオカルトじみた話まで口にし始めるとは。まあ、この業界、正気
と狂気の境界線を踏み外す連中に事欠かないので別に珍しくもない
が、確実に面倒事が増えることが予想され、気が滅入ってくる。

その辺の感情が表情に出してしまったのか、博士の顔にも失望の翳かげ
がさした。

「無理よ、お爺さま」冷やかにクロエが告げる。

「こいつらは、自分の鼻先に見えるものだけが『現実』だと思い込
んでる。そいつを後生大事にこね廻して、世界を理解したつもりで
いるんだもの。」

しかも、それがどんなに間抜けで、どんなに幸せなことなのかも
判ってない。

だから、こんなところであんな抜けた話を恥ずかしげもなくでき
るのよ」

「……君、失礼だが」

「わかった」博士は少佐のクロエへの問いを断ち切るかのように言
った。

「わかった。君らの言う通りにしよう。私をどこへなりと連れて行
って、好きなように利用したまえ」

「……よろしいのですか？」

「良いも悪いもあるまい」博士は重く疲労感をにじませながら言っ
た。

「その代わり、せめてこの船を降りるまでは、我々を放っておいて
くれ」

「いいでしょう。ただしどこで地上おがに降りるのかは、私達で決めさ
せていただきます。それと護衛として、この軍曹を残す。よろしい
ですね」

博士が無言で頷く。

それを確認すると、少佐はクロエの方へ目を向けた。
踵を返して寢室に消えようとするクロエが、一瞬肩越しにこちらを見る。

その明らかな侮蔑を含んだ視線は、どう考えても10歳の少女のものとは思えず、少佐は微かな困惑を覚えた。

後を軍曹に託し、少佐はゴンドラの前部、操舵室ブリッジのすぐ下にある通信キャビンに向かった。

客室乗務員パサジに身分証明証（ID）を見せ、個室電話の使用を申し出る。本来ならば目が飛び出るほど高額の使用料を請求される個室電話のブースに入ると、受話器のスピーカーとマイクを取り外し、代わりに内懐から取り出した音声暗号器と復号器を装着した。特務第6課技術班特製の秘話装置だ。この装置を使えば、傍受されても会話は歪ひずんだ雑音ノイズにしか聴こえない。

秘話装置についてるダイヤルを暗記しているこの日のコードに合わせ、電話の打鍵キーを叩く。

しばらく呼出音が続いた後、受話器の向こうでリレーが切り替わるスイッチ音。それが幾度も繰り返される。

回線が繋がるまで、目の前の丸い窓からぼんやりと外を眺める。既にとつくに陽は落ち、冴え冴えとした月明かりが超高度の夜空の闇を照らしている。この分厚い気密ガラスの向こうは、酸素の極端に薄い氷点下の大気が高速で吹き荒れている。生身の人間が裸で飛び出せば、瞬く間に低酸素症か凍傷で死に至る。窓ガラス一枚を挟んで広がる美しい世界は、冷やかな死の世界でもあるのだ。

そんな窓の外の景色を眺めながら、特に意識するでもなくシガレットケースを取り出してタバコをくわえ掛けた頃、回線が繋がった。

『はい、こちら鷹の巣（イーグル・ネスト）』

やや舌足らずな若い娘の声　6課の事務職勤務のチュン・二伍長である。ほとんどの正規要員が　帝国　全土に散らばり、一年中出ずっぱりな特務第6課の本部連絡要員だ。

「こちら若鷹ヤング・イーグル　なあ、この間抜けな暗号名考えたの誰だ？」

『將軍です』

「……だろつな」

『子供の頃読んでた軍事探偵小説の主人公が使っていた暗号名だそうで』

「いつそ死ね、って伝えといてくれ」

『やですよ。自分で言ってください。だいたい二年も 帝都 に寄り付かないで、何やってるんですか？』

能天気な伍長の問いに、少佐は思わず声を荒げた。

「全部、あの親父の所為だろうが！ 誰がすき好んで、洒落にならん辺境のどさ廻りを何年も続けるか！」

『……怒らないでくださいよ。大きな声出さなくても聞こえていますって』

まあ、いい。どうせ経費で落とすとはいえ、こんな無駄話を続けるためにバカ高い回線使用料を払っているわけではない。

「対象の身柄を確保した。この後の停泊所^{ステーション}で適当に地上^{おか}に降りて、陸路で 帝都 を目指す」

具体的な停泊所名を口にしなかったのは、情報が洩れることを恐れられたためだ。現時点では少佐自身もどこで降りるか決めていない。

ことが次期参謀総長の座に関わるだけに、仮想敵のリストは陸軍内部の身内から埋まってくる。どこで誰が敵に廻るか知れたものではない。直属の上司である6課課長フィン・タン少将でさえ、状況次第では敵に廻りかねないと少佐は見ていた。

……まあ、そこはお互い様だし、その意味で彼は自分の上司を「信頼」しているということでもあるのだが。

『了解しました。地上^{おか}に降りた時点で、改めて連絡をください。現地付近で使用可能な資産^{アセット}を手配します。

それで、博士の様子はいかがですか？』

「様子、ねえ……」手元のタバコをいったん口にくわえたものの、船内禁煙を思い出し、諦めて名残惜しそうに口から取って告げた。

「抵抗がなさそうなのは有難いが、あれは使い物になるかどうか判らんぞ」

『何ですか、それ？』

少佐は先ほどの博士とのやり取りを、ざつと説明した。

『……え〜つと、それはまた』 回線の向こうで、伍長がどん引きしているのが伝わってくる。

『この作戦、結構、気前良く予算も人員も使っちゃってるんですけど……』

「知らねえよ、そんな話。……まあ、博士の身柄をこちらが押さえてるってだけで、使い道はいくらでもある。無駄にはならんさ。」

それより、博士にくつついてるあの娘、ありゃあ何だ？」

「娘……？ 女の子ですか？」

少佐はクロエの特徴を手短に伝えた。

『う〜ん、ちよつと待ってください』 手元の資料をめくっているのか、紙を擦る音が聞こえる。

『こつちの資料だと、博士の息子さんは大戦初期に西部戦線で戦死して、ひとりいたお孫さんも終戦間際に亡くなられてますけど……』

「博士は戦災孤児を養子として引き取ったと言ってたぞ」

勿論、そんな説明、頭から信じてはいない。あの場では揉め事を避けてそれ以上突っ込まなかつただけだ。

『それらしい記録は特にありませんね。それに連絡船シヤトルに乗るまで博士はひとりだったと報告にあります』

「それは前にも聞いた」

『念のため、もう一度確認してみます。でも、報告に間違いがなければ、連絡船内シヤトルで合流したんじゃないかと……』

そのくらいは誰にでも想像がつく。つまり、何も判らん、ということか。くそ。少佐は胸の裡で罵った。

しかし、とするとあの娘は何だ？ 謎めいたあの物言い自体は無視していいとしても、いるはずのない存在が異物として存在している事実は無視できない。それもいつ荒事になってもおかしくないこの局面で。そもそも、彼ら二人がここにいること自体、かなり差し迫った状況だと将軍が判断していることを意味しているというのに。

……。

いやな空気だな……。

少佐は手元のタバコを再び口にくわえた。

こういう場合、大抵、場が荒れてめちやくちやなことになりがちだった。

「とりあえず、連絡船シヤトルの乗客名簿をもう一度洗い直してくれ」

「判りました。他に何かありますか？」

「そうだな……」

答えながら窓の外へ目をやる。先ほどと変わらぬ、青白い月下の夜空。そこに小さな何かが浮かんでいるのが見えた。

……何だ……？

目を凝らす。徐々に大きくなってくる。いや、近づいているのか。

人工物。航空機。獰猛な獣の鼻づらを思わせる機首に多銃身の動力機銃をぶら下げ、ずんぐりした機体の両脇には太いエンジン。頭上では腕の長い回転翼ローターが旋回している。……装甲ジャイロ？

「なあ……」

「はい」

「装甲ジャイロの実用限界高度つて、どのくらいの高さまでだ？」

機体の頭上で回転翼ローターを廻し、大気を掻き廻して揚力を得るジャイロ機は、本来、もっと大気の濃いはるか低高度で運用されるべき機種で、こんな大気の薄い超高度での運用には馴染まない。そもそもエンジン自体も低高度用と超高度用では、仕組みが大きく違い

ああ、高圧過給器スーパーチャージャーでも積んでいるのか。それでエンジン部分があるなに大きく……。

「……それつて、今すぐ調べなくちゃいけませんか？」

「いや、それが今、たまたま目の前に飛んで

そこまで言いかけたとき、不意に耳元で強烈な雑音ノイズが炸裂し、思わず受話器を放り出した。

「何だ……っ！？」

電波障害。自然現象？ いや、こんな雲ひとつない晴れた晩に

ジャミング
妨害電波か？

そこで窓の外の装甲ジャイロの存在を思い出し、我に還った。

見れば、先ほどよりずいぶんと近くまで接近した装甲ジャイロの短い両翼から、何かが切り離され、次いで閃光と白煙を吐いてこちらに突っ込んでくる　空対空ミサイル（AAM）！？

考えるより先に肩からブースのドアに突っ込み、通路に転がり出る。

立ち上がって床を蹴った瞬間、少佐は激しい衝撃と背中からの爆風に身体ごと吹っ飛ばされていた。

アリーズ を襲撃した装甲ジャイロは二機 一機は少佐の目撃した機体で、二発の空対空ミサイル（AAM）を操舵室ブリッジに叩き込んだ。近接信管が作動し、操舵室ブリッジすぐそばで炸裂した弾頭は、金属スラグの暴風で操舵室ブリッジとその下の通信キャビンミンチを捲き込んで、そこにいた船長以下の主要航海員と操舵機器を挽き肉ミンチに変えた。

もう一機は アリーズ の下部に廻り、そこに張られたレーダーや通信用のアンテナを、機首の動力機銃で順番にへし折ってゆく。一方、操舵室ブリッジを襲った機体は、アリーズ のゴンドラの左右に張り出している併せて六発の推進用プロペラ・エンジンめがけて再び空対空ミサイル（AAM）を発射 これをすべて吹き飛ばした。アリーズ はこうして頭と手足をもがれ、目も耳も奪われた。超高度の高速気流ジェットの中で、アリーズ は漂流を開始した。

「少佐、どうされたんです!？」

「……ま、いろいろあつてな」

博士たちの待つ船室にたどり着いた少佐は、驚く軍曹を脇に押しつけ、室内に足を踏み入れた。

「君、その格好は……?」

軍曹同様に驚く博士の問いを無視し、少佐は告げた。

「すでにお気づきかと思いますが、敵の攻撃を受けています」

「テロですか?」

訊ねる軍曹に、少佐は首を横に振った。

「いや、機外の装甲ジャイロからミサイルを撃ち込まれた」

「装甲ジャイロ!? この高度で、ですか?」

「そつだ。目の前でミサイルをぶつ放された。だが、撃墜するつもりなら、そのまま撃ち落とされてる 次は陸戦隊を送り込んでく

るぞ」

「陸戦隊!? しかし、どうやって……?」

「装甲ジャイロが地上からこの高度までそのまま上がってきたとは思えんし、襲撃の直前に強力な電波妨害とおぼしき攻撃も受けてる

近くに母艦がいるのは間違いない」

「しかし、ハートルランド 中原上空で海賊行為だなんて。空中艦隊の哨戒圏のど真ん中ですよ」

「さてね。当の空軍さんがその海賊じゃないって保証も、今のところないしな」

さらりと身も蓋もない可能性を口にすると、少佐は博士とクロエの方に向き直った。

「立ってください。移動します。窓際の部屋は危険です」

「敵の狙いは我々なのかね?」

「判りません。他にめぼしいVIPが乗ってる様子もありませんが、今の時点ではすべてはただの予断でしかない。

ともあれ、我々の任務は貴方がたを無事に 帝都 まで連れ戻す

こと。必要とあらば迎撃もする 軍曹!」

「はっ」

「状況9 (ケース・ナイン) だ 装備を確保して、合流ポイントへ来い」

「さすがに装甲ジャイロに対抗できる装備までは、持ち込んでませんが」

「いいさ。手持ちの装備で何とかするのが、いつもの我々の流儀だ」
飄々と言い放ち、少佐は博士の手を取った。軍曹は既に踵を返して走り出している。

「この部屋の場所が知られている可能性もあります。ゴンドラの中心部に移動して、そこで っ!」

不意に床が激しく揺れた。ゴンドラの後方から、突き上げるような衝撃 強行接舷された!?

「お出でなすったか」

少佐の口許が凄みのある形にほころぶ。

「……だから手遅れだって言ったのに」
小さく呟くクロエに、少佐は訊ねた。

「何か知ってることがあれば教えてもらえるかな、お嬢さん」

「ええ、機会があればその内にね。参りましょう、お爺様」

博士の手を取って、クロエが部屋を出る。

「……ま、楽しみが増えた、ってことにするさ」

だが、それを口にする少佐の貌は、野生の鷹にも似た鋭さを帯びていた。

アリーズ の後部接続扉が爆薬で吹き飛ばされた。

分厚い気密隔壁が破壊され、白い爆煙越しに大きな黒いシルエツトが見える。

対する アリーズ 側も、復員兵上がりの勘のいい警備員達が、敵の接舷強襲を予期して集結し、寄せ集めの遮蔽物の陰で息を潜めていた。帝国 と 同盟 とを問わず、大戦中は空軍陸戦隊による彼我の荷客飛行船への臨検や接舷強襲は日常茶飯事だった。場数を踏んだ空軍兵上がりなら、次に何がくるかぐらい先刻承知の上だ。警備隊長の号令に合わせ、警備員達が一斉に発砲する。とは言え、所詮、装備は拳銃どまり。放たれた銃弾はシルエツトの表面で火花を放ち、すべて弾かれた。

「装甲……強化外装骨格？^{エクステンション} だが、あんな小さなサイズで」

啞然とする警備隊長の眼前で爆煙が晴れ、被弾径始の高そうな丸みを帯びた人型の金属体が姿を顕した。

と、金属体の両腕が振り上げられ、そこに仕込まれた動力機銃が唸り声を放つ。

拳銃弾より遙かに破壊力のある機銃弾が、急拵えの遮蔽物を易々と貫いて警備員達を殲滅する。

わずか数秒でロビーの警備員は掃討され、金属体の背後から、武

装した兵士達が次々に雪崩込んでくる。いずれも全身を濃灰色の都市型迷彩の戦闘服で固め、頭部には軍用よりもスポーツ用を思わせる小さなヘルメット。胸部は防弾性能も考慮された戦闘用ベストを装着し、肘や膝にもプロテクターがついている。鼻から口許までは紺色のマスクで覆って、目許は防弾グラスを装着。露出が一切無く、外見からは個々の兵士の区別がまったくつかない。

それでも指揮官らしき兵士が右腕を高く掲げ、指の仕草だけで指示を下す。兵士たちは声も無く隊列を分かち、それぞれ小走りに走り出す。

その動きに一切の無駄はない。獲物めがけてしなやかに躍動する一匹の獣のように、兵士達は船内各所へ襲いかかった。

兵士達は複雑な船内通路を誰ひとり迷うことなく走り抜け、それぞれに目標へと辿りついた。

その内の一隊 船内中央部のホールに突入した一隊は、異変に気付いて集まってきた乗客たちの頭上に威嚇の発砲を行った。

「全員、その場に伏せる！」
指揮官格の兵士が大声で命じる。だが、その命令が理解できないのか、誰もその場から動こうとはしない。

即座に兵士のひとり、すぐそばで立ちすくむ女性客に自動小銃を撃ち込む。悲鳴を上げる間もなく、撃たれた彼女が床に折れ崩れる。

「全員、その場に伏せる！」
先刻とまったく同じ抑揚で指揮官が同じ台詞を繰り返す。
ホール内にいた乗客たちは、一斉に床に伏せた。

「……あーあ、皆さん、ガチガチの玄人筋さんですか、そうですね」
サイレンサー
消音器を装着した私物の自動拳銃を両手で保持しつつ、通路の端

からホール内を覗いていた少佐は、暗澹たる気分で呻いた。

ある程度予想はしていたが、敵兵の動きはその辺の復員兵を掻き集めたチンピラ空賊の類たぐいとは完全に一線を画していた。兵士一人ひとりの動きに無駄がないだけでなく、それぞれが連携し、視界と射界を有機的に共有カバしている。たつぷりと訓練を積んで編成した「部隊」の動きだった。

しかも装備にも金が掛かっている。だいたい彼らがぶら下げてる自動小銃からして、大戦末期に正式採用されたものの、戦後の縮軍のあおりで部隊配備が遅々として進まない最新鋭の銃だった。しかも、木製だった銃床ストックを金属にして折り畳み式にし、狭い空間でも振り廻しやすく改良されたカービン・タイプ。あんなタイプ出てたか？

空軍さんの陸戦隊か……だが、兵士や部隊の動きの癖は、陸軍の歩兵部隊のものに近かった。銃の持ち方ひとつ見ても、陸軍の歩兵と空軍の陸戦隊、海軍の海兵隊でそれぞれ違うのだ。

とは言え、陸軍や海軍の部隊で、こんな空の上に兵士を送り込む能力を持った部隊が編成されたなどという話は聞いたことがない。

勿論、極秘裏に設立された部隊であるにせよ、これほどの規模と練度の部隊を噂ひとつ立てずに編成するなどありえない。部隊を編成するには金と人を動かす必要があり、金と人が動けば組織内にそれなりの波風が立つ。仮にも特務第6課は軍事諜報機関なのだ。世間一般の目は誤魔化せても、彼らのアンテナまでは誤魔化せないはずだ。

にも関わらず、「正体不明」の敵が明確な脅威としてそこに在る。「……………」
煮詰まった。ひとまず正体探しは後廻しにして、敵の目的を先に考えることにする。

改めてホールに目をやると、その場を制圧した敵兵は床の乗客を次々と引き起こしている。誰かを探しているようだ。

博士を探しているのか？

だが、兵士達が探しているのは老人ではなく、子供　それも、長い黒髪の小さな女の子ばかりを探しては、無理やり引き起こして顔を確認している。

女の子……？

約一名、同じ条件の適合する身近な少女の存在を思い出し、少佐は眉根を寄せた。

何だ、そりゃ。

「……敵はこちらの想定以上のスピードで船内の検索を進めていきます。ここが見つかるのも時間の問題かと」

「いいさ。見つかる前に次の拠点ベースに移動する　で、結局、何人くらい、乗り込んできてるんだ」

「二箇小隊　100人弱つてところですか」

「豪勢な話だね、どうも。団体さんでお空のナイト・クルーズか。」

6課（ウチ）でも慰安旅行先に提案してみるか」

「將軍は面白がつて乗ってくるでしょうが、經理のチャン女史で引つかかりますよ」

「だろうなあ。そこをどう突破するかだよなあ」

「あんた達……」のんきな漫才に興ずる少佐と軍曹に、腰に手を当たたクロ工が呆れたように言った。

「自分たちの置かれた状況、判ってる？」

「勿論」少佐は軍曹が持ち込んだ軍刀サーベルの鯉口を切つて、鞘からの抜き差しを確かめながら答えた。

「その辺のハイジャック犯相手にするつもりで持ち込んだこんな装備で呐喊とっかんしたくねえな、というくらいには」

「バカじゃないの」

吐き捨てるようにクロ工が言い放つ。

「……言われちまったな、軍曹」

「言われてしまいましたね、少佐」

とぼけた表情で軍曹と顔を見合わせた少佐は、溜息ひとつついて軍刀サーベルを壁に立てかけた。

「じゃあ、まじめに状況分析でもはじめますか」

拳銃や対人榴弾など、酒瓶のケースをひっくり返して作った即席のテーブル上の装備品を脇にどけ、船内マップのパネルを置く。通路に貼ってあったのを、勝手に引き剥がして持ってきたものだ。

「まず、我々がいるのが、ここ　五層ある甲板の下から三層目、客室第2甲板中央付近ボイラー室そばにある資材用具室。おそらく改修工事か何かの際にできた不要空間を流用したもので、船内マップには載っていない。多少の時間は稼げるだろう」

博士たちより先に乗船した少佐と軍曹は、船内をくまなく廻ってこの手の空間を徹底的に調べ尽くしていた。単純に逃げ廻るだけなら、勝算はなくてはならない。

「敵勢力は船外に装甲ジャイロが一機以上、付近の空域に駆逐艦クラス以上の飛行艦が一隻以上、強襲接舷用の連絡艇ランチが一隻、この船に乗り込んできた制圧用の兵員が一〇〇人弱と推定される。

兵員の練度は高く、無防備の民間人への発砲もためらわない半面、無駄な発砲や暴力の行使は抑制されている印象を受けた。空軍の陸戦隊か陸軍ウチの特殊部隊コマンドクラス　いずれにせよ、かなり高度に統制されたプロフェッショナルだと判断される。つけいる隙があまりない、手強い連中だ。

で、そいつらの目的だが　」

少佐は博士に寄り添うように立つクロエへ視線を向けた。

その視線にクロエは苦笑して答えた。

「あたし、つてことなのね」

少佐はクロエの視線を無視し、博士に向かって告げる。

「……連中は他の人間には目もくれず、黒髪の女の子ばかりを探していました。状況から考えて、こちらのお嬢さんを探していると考えられます　しかし、あまり驚かれてはいけませんね」

少佐の問いに、博士は呻くように言葉を洩らす。

「私が同行することで、彼らも無茶を控えると思ったのだが……」

「まるで、彼女の『亡命』に博士が付き合ったかのように、聞こえますが」

「そのとおりよ」

あっさりとクロエは肯定した。

「そもそも、君は何者だ？」

少佐はストレートに訊ねた。

「さつき博士が言いかけたのを聞こうとしなかったのは、そっちの方でしょ」

「……世界を裏から支配して、自分たちの都合で戦争引き起こす、世の中よりはるかに高度な科学技術を持った秘密結社。君はさしずめ、その組織のお姫さまってところか」

「そうね。当たらずとも、遠からずってどこかしら」

少佐は深々と溜息をついた。

「……軍曹、お前ならきつと信じてくれるだろうが、俺にもそんな古臭い軍事探偵小説みたいなロマンチックな設定に憧れた時代があるんだ」

「判ります。男の子はみんなそうです」

「まあ、女と仕事は幻想をなくしてからの方が味わい深いんだが」

「少佐、何気に物言いが下品です」

「おっと、失礼」

「……あなた等、まじめに人の話を聞く気ないでしょ」

「いや、まじめに、と言われてもな」少佐は投げきった口調で答えた。

「いい歳した大人の男には、口にすることさえ勇気のいる言葉つてのが少なくないんだ、お嬢さん」

「……」

「まあ、いつそ大富豪の遺産継承者で、命を狙われてるだけでも言うてくれるならばまだしも」

「じゃあ、訊くけど」「クロエは冷やややか告げた。

「あなたの知ってるこの国の大富豪に、よりもよって中原の真上ハートランドで帝国の威信に真っ向から泥を塗る度胸のある奴がいる？」

「……」

帝国はその覇権の拠り処ゆかりどころを兵に在りとする。故に帝国の国事法では軍を「第一の社会資本」とし、これを毀損する者の罪をもつとも重く問う。

そしてそれだけに、帝国 三軍は中原ハートランドへの敵の侵入や叛乱騒擾の発生を何よりも嫌う。大戦末期にたった一隻の 同盟 爆撃艦の侵入を見過ごし、みすみす 帝都 空爆を許した空軍は、直後に自裁した空軍参謀長を筆頭に、のちに「空軍省の大虐殺」と称されるほどの数の将官が失脚する羽目に陥っている。

戦後のこんな時期に、中原上空でのこんな公然たる武力行使を見過ごせば、空軍の存在理由すら問われかねない。これが陸軍や海軍の仕業とみなされれば、彼等是为らうことなく内戦の口火を切るだろう。それが判っていてこんな無茶をしでかす 帝国 軍人はいない。ましてや、陸軍の人間なら、今はどんな高空を飛んでいても、いずれどこかの大地に足を下ろさざる得ないことを知っている。そこが大地の裏側、敵地のだ真ん中だろうと、そこに部隊を送り込む方が、空軍の縄張りに殴り込みをかけるよりはるかに気楽な任務のはずだ。

ましてやクロエの指摘するとおり、民間の「大富豪」如きが、たかが「お家騒動」でここまでやる度胸なぞあるはずがない。

ならば 同盟 を始めとする諸外国の軍隊と言ふことになるが、これも個別の暗殺だのテロだのならともかく、ここまで公然とした軍事行動を行えそうな兵力投入能力を持つ国は 同盟 本国くらいしか考えられない。しかし事が事だけに、露見すれば、確実に「宣戦布告なき戦争行為」として扱われる。当然、この場だけの話では済まないから、本国でも全面戦争に備えた軍配備を進めているはずだ。しかし今のところそうした情報はなく、そもそも今の 同盟 の置かれた政治経済状況を考えても、とてもそんな冒険に踏み込む余力はないはずだ。

後は 帝国 の治世下で弾圧されている民族系分裂主義者か宗教カルト組織、共和主義者に無政府主義者アナキスト どれも、金も力も人も知恵も足りず、それ故に当局から手っ取り早い点数稼ぎの対象として弾圧されている間抜けな連中（パブリック・エネミー）どもだ。こんな組織的で末端まで神経の行き届いた軍事行動など、思いつく

ことさえ出来ないだろう。

そこへ加えて、それだけの大胆不敵な組織がここまでして捜しているのが、小娘ひとりときた。

支離滅裂にもほどがある。自分が事態に捲き込まれた当事者でなければ、とつとと布団でもかぶつて寝ているところだ。

その意味で、クロエや博士の言うような、落ちこぼれの少年が教室の片隅で授業そっちのけで書き殴る妄想ノートのような話が一番しっくりくる。

……のだが、三〇過ぎの良い歳した大人が、そんな話を「はいそうですか」と受け入れられるかという、それはまた別の話なのだった。

明らかにテンションを下げている少佐と軍曹に、

「……口でいくら説明しても無駄のようね」

溜息混じりに洩らしたクロエは、ごく自然な動きでテーブル上の拳銃を？み、消音器付きの銃口を自分の胸元に向けた。

「……って、おいっ！ バカ、やめろ！」

止める間もなく、引き金を引く。くぐもった破裂音。少佐が小さな手の中の自動拳銃を取り上げる頃には、既に数発の銃弾がクロエの薄い胸板に叩き込まれていた。

その場に崩れ落ちるクロエを、少佐はとっさに支えて叫ぶ。

「おいっ、しつかりしろ！」

子供の手の届く場所に銃を放り出しておくなぞ、軍人以前に銃を持つ大人として最低のミスだった。痛恨、と言っている。この程度の危機に動揺して判断が抜けていたとなれば、この後の行動すらおぼつかなくなる。何より、子供に目の前で死なれるのは、何度経験してもそうそう慣れるものではない。

胸の内で自身を激しく責めつつ、クロエの華奢な身体を揺さぶる少佐に、博士はひどく穏やかに告げた。

「落ち着きたまえ、彼女は無事だ」

「無事って、博士」

「彼女の筐体は、そう簡単に壊れない」

「は？」

何を言ってるのか。問い返しかけて、強烈な違和感　血の匂いがしない？

「博士の言つとおりよ」

自分を抱く少佐の腕が？まれ、クロエの声が聞こえてくる。

驚いて見下ろすと、クロエが目を細めて微笑っている。

「な……お前……っ!？」

驚く少佐の前で、クロエはドレスの胸元を開き、薄いふくらみを見せる。穴の空いたキャミソールをまとった白い肌には、傷ひとつついてない。

「機人……いや、身体まで機人化なんて、それもこんな小さな子供の」

戦火の拡大によつて激増した傷病兵の生活復帰や戦場復帰を促すため、軍主導で推し進められた機人化政策　であるが、現実問題として失われた四肢の置き換えと、そこからの延長として車輛等との接続操作に留まり、内臓器官の置き換えや強化には至っていない。人体程度の大きさの筐体では、生存に必要な人工臓器を収めることできないからだ。

ましてや子供の身体に　しかも、こうして抱いていて、体重はこの年頃の娘と、さほど変わらないように感じられる。肌の質感も美しく、産毛の類まで再現され、触れていて暖もりすらある。これで拳銃弾を至近距離から撃ち込んで、傷ひとつつかない強度まであるとは、どういう技術なのだ？

だが、しかし、こんなものが存在するなど

「まだ信じられない？」クロエは少佐の首にその細い腕を絡めると、悪魔のような蠱惑的な微笑で囁いた。

「なら、あたしの瞳をよく見なさい」

命ぜられるままその瞳を覗き込む。人間そっくりの極めて精緻に造り込まれたその瞳彩の奥に、生身の人間には在るはずのない人工

的な回路の存在と、何かの製造コードらしき微細な文字列が見えた。

「……………っ!？」

「ま、そういうことよ」

絶句して硬直する少佐の腕の中からするりと抜け出し、クロエは床に足をつけて言った。

「これで判ってもらえたかしら？」

「……………待て、いや、ちょっと待て!」くらくらとした目眩に襲われながら、少佐は何とか目の前の現実を受け留めようと必死に踏みとどまる。

「つまり何か？ 奴等はお前のその身体を狙ってるっていうのか」

「ちよっと違うわね。連中が狙っているのはあたし自身と」

はだけた襟元に手を当て、クロエは再び瞳を猫のように細めて告げた。

「あたしの『棺』よ」

「あー、待て。いいから、ちょっと待て。今、頭を整理するから、少し待て」

いまだに残る目眩の余韻に眉間を強く揉みながら、胸元からシガレットケースを取り出す。

「少佐、禁煙です」

「禁煙よ」

「禁煙だな」

「……………っ！」

言葉にもならぬ屈辱をねじ伏せ、シガレットケースを内懐に戻す。代わりに、やや八当たり気味に軍曹を睨みつけた。

「軍曹、なんでお前はそう落ち着いていられるんだ？」

「考えるのは士官殿のお務めですから」軍曹はしれっとした表情で応えた。

「兵隊は士官殿ヘイタイの示される眼前の敵を、ただ殲滅せんめつするのみです」

「……………お前は兵卒ヘイタイじゃなくて下士官だろうが」

そこはおのずと求められる役割が違うのだが、勿論、軍曹もそんなことは百も承知でとぼけている。大戦中からの付き合いなだけに、お互いその辺は心得たものだった。

「まあ、いい」脳裏に去来するさまざまな想いを、その一言でまとめて呑み込み、宣言する。

「状況を整理する。まずは敵の正体だ。あいつらは何者だ？」

「ある目的の下に、世界の技術開発を誘導し、そのために国家や社会システムそのものにまでコミットし、支配し、意のままに操る秘密結社……………って、そんなところかしら」

「何の説明にもなっていないの、承知で言ってるだろ、お前？」

「まあ、嘘はついてないし、この辺は話しても時間の無駄だからはしよるわね」

「無駄かどうか、決めるのはこっちだ」

「あんたが知らなきゃならないのは、敵の戦力規模と目的でしょ。あんた方には到底理解できない『世界の真理』を延々講義して時間を無駄にしてる内に、あいつらに突入されて蜂の巣にされたいってんなら止めないけど」

「……………」

「ま、生きて地上おがに降りれて、まだ聞く気があるなら話してやってもいいわ」

生まれてこの方、ここまで真剣に子供に殺意を覚えたことがなかった少佐だったが、耐えた。陸軍に奉職して一〇と余年、あらゆる価値観が紙切れのように破り捨てられる最悪の戦場で軍人稼業の産湯を浸かり、戦後も裏切りの堆積層上で繰り広げられる苛烈な謀報インテリジェンス戦の最前線で生き延びてきた自分である。常に流動的で不安定な環境でも自分を見失わず、戦士としての誇りとひとつまみの諧謔かいぎやくさえあれば、どんな戦場でだって生き延びてこれた。

そつだ、耐える。耐えて、この戦場も生き延びるのだ。

そう自分に言い聞かせながら、質問を続ける。

「いいだろう、じゃあ、敵の規模はどれくらいだ？」

「判るわけないでしょ、そんなの」

忍耐力が簡単に臨界点を突破し、反射的に壁に立てかけた軍刀サーベルに手を伸ばす。その腕を軍曹に掴まれた。

「少佐、いけません」

「……軍曹、カバラスの峠で敵の機甲師団を一箇小隊で三日支える羽目になった時のことを覚えてるか？ こいつはあの時よりきついですぞ」

「あの時も我々は勝ちました。今度も勝ちましょう」

つかの間、戦場の友愛にすがって理性を取り戻す少佐に、クロエはあっさりと言いつつ放った。

「意外とこらえしようがないのね」

「黙れ」

「まあ、敵の動員規模としては、あんた等がさつき分析した辺りが妥当なところじゃないかしら。空軍の目を掠められるのは、^{ハートランド}中原ではそのくらいが限界でしょ」

「……それは、連中は空軍とはつるんでないってことか？」

「動静は正確に把握しているはず 特に、周辺の艦隊の配置なんかはね。でも、連中の性格からして、直接的なコミットメントをして俗世に痕跡を残すことをひどく嫌うから、空軍に圧力なんか掛けていないと思う」

「となると、空中艦隊の^{シフト}配備状況は、通常のままだな」

「電波妨害なんかで多少の時間稼ぎはするでしょうけど、空中艦隊がくれば、きつと交戦を避けて引き上げるでしょうね」

「とすると、^{ジャミング}電波妨害によって航路管制局のレーダーからアリーズ^{ロスト}が失跡、空軍に通報、最寄の空母からの艦載機の発進、初期接触までで襲撃開始から二〜三時間。艦載機は適当にあやしてごまかすにしても、後から来る哨戒艦^{ピケット}に捕捉されたらドンパチ抜きでの離脱は難しくなる。それまでに決着をつけるとして」

左手首に捲いた無骨な軍用腕時計に目をやった。

「タイムリミットは深夜〇時から一時（ミッドナイト・プラスワン）ってところか」

「それまで逃げ延びれば、我々は助かるのだな？」

「違うわ、博士」クロエが細い首を振って告げた。

「その時間^{とき}がきたら、連中はこの船を沈めて逃げ出すっていう意味よ」

「そんな……！」

絶句する博士に、少佐も頷いた。

「残念ながら、私たちの意見も一緒です。わざわざ他に目撃者もないこんな超高空で襲撃を掛けておいて、最大の目撃者であるアリーズの乗員乗客を生かして返す必然性はありません。操舵室^{ブリッジ}をまず真っ先に潰した時点で、乗っ取りの意思はまったくないと見ていい」

「ど、どうにかならんのか！」

「それを令、考えているところですよ」

結局のところ、この場で唯一の「素人」となってしまった博士に、少佐は辛抱強く言った。逆に言えば、クロエの堂にいった落ち着きぶりは、どう見ても「素人」のそれではない。全身機人というからには、間違いなく見かけ通りの年齢であるはずもなく、ますますもって信用の置けなさが募ってくる。

そんなクロエを睨むように少佐は訊ねた。

「それで、改めて訊くが、敵の目的はお前なのか？」

「あたしとあたしの『棺』ね」

「それだ　その『棺』ってのは何だ？」

「『棺』は『棺』よ」「グフ」

博士とクロエが連絡船から乗船した際に、個人の手荷物に混じって運び込まれた棺桶かんおけを思い出す　あれのことか。

「中身は何だ、と訊いているんだが」

「……まあ、あたしの追加装備オプシヨン、ってとこね」

説明になっていない。だが、すっ惚けるようにそっぽを向いたクロエの表情を見ると、これ以上、つついても簡単には話しそうもない。

ムカついたが、時間も惜しいので先に進む。

「その『棺』とやらは最下層の手荷物置き場か。軍曹、連中がこの船に乗り込んで、どれくらいになる？」

「三〇分ってところでしょうか」

「もう、奪取されていてもおかしくないな」

「大丈夫よ」済ました表情でクロエは断言した。

「『棺』に妙な動きがあれば、どこにいても感知できるから」

ああ、なるほど。どういう理屈か訊く気にもなれんが、それはなにより。

「それに、特別料金を払って、次の停泊地まで時限式のロックの掛かる貴重品保管庫に入れてあるから、連中の装備でも開けるのに一

時間は掛かるでしょうね」

「連中がその『棺』^{かひこ}だけを回収して、気が済むという可能性は？」

「当然あるでしょうけど、時間の許す限りあたしを捜索するつもりだと思っわ。あれだけの戦力を送り込んだできたのは、あたしとの交戦を想定しているからだと思っ」

「交戦！」少佐は大仰に声を上げた。

「こんな子供と戦うのに、完全武装の強襲兵^{コマンド}を100人も送り込んできたつてののか？」

クロエは醒めきつた視線を返してきた。

「バカじゃないの」お下げの片方を掻き上げつつ、吐き捨てるように告げる。

「機人相手の戦闘は、同クラスの機人をぶつけるか、飽和波状攻撃で絡めとつて対装甲火器のスタンドオフ攻撃で潰すかに決まってんじやない。あんたも片腕機人化してるんだから、そんな戦術理論の初歩の初歩、いまさら説明させないでよ」

「……ご丁寧にどうも。そんな話をしてるんじゃないつてのは、勿論、判つてて言つてるよな？」

クロエが危険な冷光をたたえて瞳を細める。

「どうしてこう、男つてのはいつペン力尽くでねじ伏せられないと、目の前の現実も理解できないのかしらね」

「なるほどなるほど。強襲兵^{コマンド}100人に匹敵する実力を、こちらのお嬢さんが見せてくれると。そいつはまた剛毅で楽しそうだ」

凶暴な笑みを浮かべつつ、少佐は軍刀^{サブエル}の鯉口を切る。

「少佐！」

「クロエ、やめろ！」

軍曹と博士が慌てて割つて入る。

「どけ、軍曹。どうせこいつの中身は根性のねじくれた婆あだ。膾^{なます}に叩き斬つて繋ぎ直せば、多少はましになるだろう」

「いいかげんにしてください。戦争が終わってから、少しは丸くなつたかと感心してたのに」

「大丈夫だ。俺ももう大人だ　一撃で仕留めてやる」

「ああ、だからもうやめてください！」

「そーよあ、ここでかわいい部下の制止に乗って収めれば、あなたの薄っぺらい面子も保たれるってものよ」

「ほおお……」

口許を歪めながら、少佐は軍刀の柄に右手を触れるか触れないかの距離で添えた。左脚を引き、右脚は一步前に踏み込む。半身によじった身体でわずかに腰を落とす。野陣抜刀術　敵味方入り混じった狭い塹壕内で、出会い頭の敵兵を瞬時に斬り殺すことに特化して完成された、帝国　陸軍士官必殺の戦闘術である。

両眼からはとうに感情は失せている。既に殺戮装置としていつでも自動的に駆動できるよう、精神はどこまでも冷え込んでゆく。

一方、それを眺めるクロエの瞳も、極北の低温のまま細められてゆく。

両者の緊張の水位がじわじわと高まってゆく。

これはもう手に負えないと察してか、軍曹は少佐の斬戟の軌道から身を引いて頭を抱えている。

「やめたまえ、クロエ！」真つ青な表情で博士が叫ぶ。

「少佐、君もやめるんだ！　君では彼女にかなわない。君のその右腕でもだ。彼女はそう造られてる！」

「……………造られてる……………？」

抜刀の姿勢は解かぬまま、少佐は博士の言葉を繰り返す。と、不意にある単語が脳裏に浮かぶ。

「……………機神……………」

大戦中、戦場の兵士たちの間では、ある噂が流れていた。

機人の中の機人。完全に機械化された一箇師団を単独で撃破し、あらゆる火器や機械車両と接続して支配下に置き、無線の傍受や妨害も思うがまま。まさしく機人の神　故に称して機神。

その辺の機人とはまるで次元の違う戦闘力を持った彼らで編成された、最強の機族がある……………。

どこの戦場にもありがちな、最強部隊幻想。上官からどれほど強く否定されようと、兵士たちは根強くそんな噂を口にし続けた。身過ぎ世過ぎの明日をも知れぬ兵隊稼業で、前線の兵士たちはそんな出所不明の噂にでもすがって安心したかったのだろう。

勿論、実在などしない。本当に存在していれば、危うく中原への敵機甲軍の侵入を許しかけるような苦しい戦いくさになっただはさすがない。

まっとうな士官なら、一笑に付すべき話題だった。

だが、目の前で至近距離から拳銃弾を撃ち込まれて傷ひとつつかない肌や、現代技術ではありえない全身機人の少女の筐体ゴデイを見せつけられ、他ならぬ機人開発の泰斗たるホアン・フー博士がこうまで口になるとさすがに無視はできない。なおかつ、「まっとうな士官」であるとは、自分自身でも思っていない。

いっその場で確認してやるか、という強い誘惑に駆られたものの、いったん余計な雑念が混じってしまった以上、氣勢が削がれてしまったことは否めない。ここで斬戟を放つても、斬れそうな気がしなかった。

少佐は小さく舌打ちすると、鯉口を戻して襲撃姿勢を解いた。

「……それだけ大口叩く以上、戦力としてカウントさせてもらうぞ」
少佐はいまいましげにクロエを睨みつける。

「その前にまともな作戦捻り出しなさいよ」

「勿論、棒給分は働くさ」

「安月給じゃないことを祈るわ」

「さて」気を取り直して、少佐は切り出した。

「状況はだいたい判った」と、いうより、このバカ女がまともな情報をろくに寄せさなえなので、本質的な状況はさっぱり判つたらんが、これ以上、考え込んでも始まらんことはよく判つたので先へ進もう」

「言いたいことがあれば、はっきり言ったら」

「たった今、これ以上ないくらいはつきりと言つてのけたはずだがな」

「コミュニケーションって難しいわねえ」

「……とりあえず、こいつを連中に突きだして丸く収めるという選択肢は、残念ながらなさそうだ」

本当に心から残念そうに告げる。

「ありもしない選択肢なら、わざわざ口にするな」

「次に、脱出艇などで我々だけ アリーズ（ふね） から離脱する選択肢は、制空権を敵に握られており、これも不可だ。装甲ジャイロにすぐに撃墜される。」

一方、敵は空軍の空中艦隊と本気で殴り合うまでの覚悟はないと見られる。

そうであれば、我々にとって最良の選択は、空中艦隊の到着まで交戦状態を維持し続けることにある」

「……言つとくけど、あいつら、いよいよとなれば、兵隊ヘイタイがこのアリーズ（ふね） を沈めにかかるわよ」

「だが、まだやってない つまり、それは敵の作戦目標に隙があるということだ」

「隙、ですか？」

「そうだ、軍曹。この娘の身柄を押さえるという目標と、抹殺するという目標、『棺つひ』とやらを奪取するという目標は、厳密にはそれぞれ乖離している。それを、おそらくある時点ないし損害の規模で切り替えるつもりだろう。」

で、あれば、我々はそこを切り替えさせなければいい」

「具体的には？」

訊ねる博士に、少佐は頷いた。

「ひとつは先ほど言ったように、空中艦隊の到着まで船内での戦闘を継続する。敵味方入り混じった競合状態コンテキストを維持して、敵が破滅的な選択を行うことを防ぐ。」

もうひとつは、空中艦隊の到着の直前に、船外でこちらを狙って

いるであろう敵艦の砲射程の外へ離脱する」

「どうやって？」

「気囊のガスを緊急放出して高度を下げる。高速気流ジェットの外へ出れば、敵艦を頭上通過オーバーシュートさせることができる。空中艦隊の到着とタイミングを合わせれば、敵は対処できずに離脱するだろう」

「でも、操舵室ブリッジは真つ先に破壊されたんでしょ？」

「ガス放出は、操舵室ブリッジ以外からでも可能だ。船内マップにはないが、ゴンドラの上に緊急時用の浮力調整室がある。ここを押さえれば、高度を下げられる」

「問題点は？」

「勿論、100人の敵兵を排除しなければならぬ点のひとつ。この人数だけでは無理だから、敵の兵器を奪取し、船内の兵役経験者を募って部隊を編成して反撃する」

「……その時点で、考えるだに難易度が高そうなんです」

「言うな、軍曹。次にガス放出のタイミングだ。早すぎれば敵艦に対処する時間を与えるし、遅くては意味がない」

「とすると、敵艦の位置の把握と、空中艦隊との連絡の確保が必要ね」

「後者はそもそも、敵艦の電波妨害を止めない限りどうにもならない。勘で対処するしかないな」

「勘任せって……どんな作戦よ」

「うるさい。敵艦の位置は、敵兵を捕らえて喋らせよう」

プロの軍人の口をそう簡単に割らせられるとも思えなかったが、他に選択肢はない。

「結局、行き当たりばったりって話じゃない」

「文句があるなら、代案を出してみる。この戦力で他にどうしろっというんだ」

唸るように罵る少佐に、クロエは平然と言い放った。

「あたしは下の貴重品倉庫に『棺柩』を取りに行くわ」

「……人の話を聞いてなかったのか？」

「どうせ行き当たりばつたりな作戦なんだから、だつたら少しでも戦力を強化しておく方がいいでしょ。そのためにも『棺』は必要よ。それにこのまま浮力調整室に向かったんじゃ、時間が余るわ」

「……………」

確かに、こちらの意図を当面誤魔化するのに悪い手ではない。敵の気を惹きつつ時間稼ぎをせねばならないのも事実だ。「棺」とやらを入手することがどれほどの戦力増強になるのかは知らないが、選択肢としてありえなくはない。この人数で敵に真っ向から突っ込んでいって、無傷で済むのなら、だが。

「じゃあ、行きましようか」

躊躇する少佐をよそに、クロエは立ち上がると、すたすたとドアへと向かう。

「おい、待て、何ひとりで勝手に動こうとしてるんだ！」

「あんた等は勝手に浮力調整室でも何でも目指せば？ それとも、あたしに付いてくる？」

「……………」

愉しげに細めた目線で振り返るクロエに、少佐は今度こそ真剣に叩つ斬つてやりたいと思った。

「何よ、結局ついてくるんだ」

「うるさい。戦力の分散は避けねばならんし、お前と博士から目を離すわけにもいかん」

「宮仕えは大変ね」

「黙れ」

船内の通風用の配管を伝って、全員、最下層の甲板まで辿りついている。先ほどと同じような用具室だが、ドアひとつ隔てた通路には敵兵が充満しており、一戦も交えずに貴重品保管庫まで突破するのはまず不可能だ。

「ぼちぼち保管庫の扉が破られてもおかしくない時間だが」

「どうも、何か作業をしたり、運び出したりしている気配はありませんね」

「つてことは……おい、こっちの行動は読まれてるぞ」

「だから？」

平然とクロエが訊き返す。

「同じ保管庫を目指すにしても、他に手を考えた方がいいって言うてるんだ。だいたい、こっちの装備は軍刀こいつと軍曹のライフル、それに拳銃二丁しかないんだぞ」

軍曹のライフルは、大戦初期から末期にかけて陸軍の主力装備だった半自動小銃を、空挺仕様パラトルーパーに銃身と銃床を切り詰めたものだ。いちいち槓ポルトを引かなくても連射はできるが、敵の自動小銃ライフルと違って全自動フルオートでの発砲はできない。それはこうした屋内戦では必ずしも不利ではないのだが、「面」としての制圧力に劣るのは事実だ。

「こっちは非戦闘員の博士も同行している。どうせ行くにしても、なるべく敵の不意を」

「博士の身はあんた等が護ってくれるんでしょ」

「……………」

一瞬、目の前の少女が何を言ってるのか理解できなかった。

「……あゝ、それはつまり、お前ひとりで片づけると。そう言いたいのか？」

「そうよ。じゃあ、銃を借りるわね」

はつと気付いたときには、腰のホルスターが軽くなっていた。

軍曹の腰のホルスターからも拳銃を摺り抜き、両手に消音器付の拳銃をぶら下げたクロエは、啞然とする少佐たちを他所にいきなりブーツでドアを蹴り開けた。

「何しやがる、このバ　っ!？」

怒鳴りかけ、吹き飛んだドアの向うに身構える敵兵の姿を認める。こちらの居場所が発見されていた　いや、そんなことはどうでもいい。

「くそっ!」

考えるより先に身体が動き、抜刀した軍刀の切っ先が敵兵の胸板を刺し貫く。

その動きをあらかじめ読んでいたかのようにするりと回避して、クロエは通路に滑り出る。

通路は案の定、敵兵でいっぱいだった。足の踏み場もなく集結した兵士達は、いずれも即時発砲の姿勢で自動小銃を構えている。だが、いきなりのクロエの行動に驚いてか、誰も身動きができない。その隙にぐつと身を屈めたクロエは、弾かれたように床を蹴って跳躍する。黒いドレスを翻し、宙に舞ったクロエは、両手の拳銃を発砲しながら敵兵のただ中に飛び込んでゆく。

一方、少佐は最初の敵兵から既に軍刀を引き抜き、流麗な軌跡を描いて刀身を鞘に戻す。抜刀術の攻撃発起は鞘の中から始まるのだ。そのまま通路に飛び出し、軍刀の柄に手を掛けたまま、クロエとは反対側の敵へと身体を向ける。

「　っ!」

強烈な気を吐きながら、「右腕」を戦闘モードで起動。内蔵する超振動発振器のジャイロモーターが高速回転を開始する。右手には

めた白手袋が弾け飛び、金属製の掌が露出した。そこに仕込まれた伝送コネクタを介して、軍刀に凶暴な振動波が流れ込む。抜刀！
甲高い高周波音とともに斬光が閃き、落とした腰から目の前の兵士を自動小銃ごとあっさりと斬り払う。

引き続き魔術のような素早さで刀身は鞘へと戻り、再び抜刀。次々と兵士達を斬り伏せてゆく。

野陣抜刀術に、少佐の右腕に仕込まれた超振動発振器を組み合わせた必殺の剣。雷塵。超高周波で振動する刀身は、薄めの装甲板くらい簡単に斬り裂いてのける。そこに、出会い頭の不期遭遇戦が延々と繰り返される、血で血を洗う煉獄と化していた塹壕戦で砥上げられた少佐の剣技が結びついたとき、爆発的な殺傷力を持つ近接戦闘術として戦場に小さな暴風が捲き起こる。

瞬きをする間も与えられず、斬光が銀系のように空間を縫い駆けて、四人の敵兵は全身を覆う重装備ごとすべて一刀で斬り捨てられていた。

その間、クロエもまた落下軌道上で兵士のひとりの顔面を撃ち抜き、のけぞるその胸を蹴って再び飛翔。くるりと空中で一回転して、兵士たちの後方へ降り立つ。

銃を持った両腕を大きく開くと、まるで舞うようなステップで下から大柄な兵士たちの群れに飛び込んでゆく。

そんなクロエへ、兵士たちが撃ち下すように上から発砲。だが、軽やかに身体を翻して火線のことごとくを避け、代わりに手近な兵士の膝を拳銃で撃ち抜く。横合いから蹴り込まれたように膝を崩す敵兵の脚を払って転倒させ、発砲しようとしたもうひとりの兵士へと倒れ込ませる。

その間に旋回を続けるクロエは、別の兵士の懐に飛び込んで背中を預けた。まっすぐ上に伸ばした右腕に握られた拳銃の銃口は、兵士の顎にぴたりと張り付き、無造作に数発の銃弾を叩き込む。

先ほど負傷した仲間倒れ込まれて発砲の機会を失った兵士が、それを見てとっさに銃を向けようとするが、それより早くクロエの

左手の拳銃が火を吹いた。

機関銃並みの速射に、瞬く間に残弾すべてを撃ち尽くして左手の拳銃は遊底解放スライド・オープンに陥る。即座にそれを床に落とすと、続いて右手の拳銃を発砲。これも撃ち尽くして遊底解放スライド・オープンに至るまでに、兵士の身体はのけぞって背後の壁に叩きつけられていた。防弾装備のない顔面や頸部に何発か喰らったのか、それつきり動こうとしない。

と、膝を撃ち抜かれて床に倒れていた兵士が、仰向けになって自動小銃を撃とうとする。

だが、いつの間にか背後の兵士から自動小銃を奪っていたクロエが、それより先に引き金を引いていた。

スタツカートのような乾いた銃声が鳴り響き、拳銃弾よりはるかに強力なライフル弾が、防弾ジャケットごと兵士の身体に撃ち貫く。わずかの間、痙攣するかのように銃撃を受け留めると、兵士は自らの身体から流れ出す血の海にその身を沈めた。

殺戮を終えたクロエが自動小銃を床に落として、ゆっくりと振り返る。表情を欠いた白く美しい貌かおはさながら人形のようなだったが、唯一、その切れ長の瞳だけはどぶの底をさらう野犬のような濁った光を宿していた。

それを見て、少佐はあつさりとな得した。つまるどころ、俺と同じか。

スイッチが入れば、自動的に殺戮を開始する機械。そこに悦よろこびはなく、悲しみはなく、苦痛もない。罪科の意識も、屍者への憐憫もない。拒絶するでもなく、悩むでもなく、ただただ自動的に在り続ける自分を、ただそう在るがままに受け入れた者の瞳め。

彼の場合、一〇代の末からの数年間という個人の人格形成にもつともかけがえのないこの時期を、砂が泥濘になるほどに血を吸った西方辺境領の最前線で過ごすことになってこうなった。市井に生きる善良な職人としてまっとうな人生を終えた父や祖父。そんな「立派な大人」になるために大切にかけがえのない何事かを、自分はそこで決定的にへし折られた。

だから、戦後も退役することなく、辺境地帯をハイエナのようにうろつき廻り、拳句の果てに、こんなところで今日もヒトをコロしている。

そんな自分への侮蔑と絶望とが混じりあい、それがやがて当初の熱量を喪^{つしな}つて冷たく溶け固まるとああいう瞳^めになるのだ。

ああ、そうか。だからか。

あの娘の姿を初めて見て以来、感じ続けてきた奇妙ないらだちの正体によくやく気付いた。

自分と同じ翳^{かげ}を帯びた瞳^めが、未来の可能性と生命力に満ちているべき「子供」のその眼^{まなこ}に宿る矛盾　そのひどく倒錯した感覚が、自分の中のいらだちを誘うのだろう。

無論、それが判ったからといって、この娘に何がしかの共感を覚えたわけでもない。嫌悪すべき自己像が体よくこうして外部化してくれたのなら、素直に憎しみをぶつけさせてもらうべきだと思つた。ふと見れば、クロエもこちらを見ている。こちらの視線に気付いたのか、眉と鼻先を顰める。

なるほど。こいつも同じ結論に達したか。

と、少佐に最初に胸板を貫かれて床に倒れていた兵士が、いきなり半身を起こして自動小銃^{サブエル}をクロエへ向けた。

床を蹴りつつ少佐は軍刀^{サーベル}を抜こうとするが、ぎりぎり刃先が間に合わないのは判っていた　くそっ！

狭い通路に耳を聳する銃声が鳴り響く。

兵士の身体が殴りつけられたかのように横にふっ飛び、壁に叩きつけられた。

「大丈夫ですか、ふたりとも」

ライフルを手に軍曹がのそりと用具入れから顔を出す。

「おかげさんでな」

溜息混じりに少佐が礼を言う。

クロエはお構いなしに、死んだ敵兵の装備を漁っている。生々しいな、どうにも。苦々しく睨みはしたものの、少佐自身も自動小銃

を拾って軍曹に渡す。

「こつちを使え。この先で必要になるのは、命中精度より制圧力だ」
「はあ……」

あまり気乗りしなげな軍曹に自動小銃を押しつけ、敵から奪った無線機らしきものを器用にいじっているクロエのそばへ向かう。

「これで、ざっと一〇人ほどか」

少佐は足元の敵兵の屍体をざっと数えて言った。

「良かったじゃない。これを一〇回も繰り返したら敵を全滅できるわ」

「バカ野郎、こんな出会い頭の不意打ちみたいな虫の良い話が何度も続くか！」

「あつそ」

怒鳴る少佐を無視して手元の無線機をいじっていたクロエは、飽きたかのように少佐に放った。

「あ？　なんだこれは？」

思わず受け取ってしまったから、無線機の奇妙さに驚く。帝国陸軍の携帯無線機ウォークリーキーの数分の一のサイズで、次々に文字が浮かんで消える小さなパネルがついている。それを眺めているだけで、何やら妙に不安な気分になつてくる。クロエの身体同様、「ここに在つてはならないモノ」の類たくいにしか見えない。

「おい、こいつはいつたい……？」

「持つてなさい　それより、すぐに次が来るわよ」

そつけなくクロエが告げる。確かに軍用ブーツがまとまって床を蹴る音が近づいてくる。意外に近い。先ほどの戦闘を受けて集まつてきているのだろう。

「……おい、この後のことちゃんと考えてんだらうな？」

「勿論」クロエは敵兵から奪った二丁の大型拳銃を両手に構え、猫のような笑みを浮かべて言い放った。

「片っ端からぶつ飛ばせばいいのよ」

結局、それか！　この野郎！

通路の角から飛び出した先頭の敵兵を、少佐が一刀で斬り捨てる。その下から滑り込んだクロエが二丁拳銃トゥーハンドで撃ちまくり、ひるんだ後続の兵士たちへ少佐が突っ込んで抜刀を振るう。

後方では博士の身を護りつつ、軍曹が自動小銃を連射して、挟み打ちしようと迫る敵兵を牽制している。

「このまま保管庫まで突っ切るわよ！」
「無茶いな！」

言い返しはしたものの、まともに抗議する余裕はない。敵も素人ではないので、一瞬でも隙を見せれば殺られるのはこっちだ。どだいな戦力にこれだけ差があつては、勢いで押し切るといふこのやり方にも理がなくなはない。

……結局、クロエの行き当たりばつたりペースに捲き込まれて
いるだけ、とも言うが。

敵兵の一群を突破し、少佐とクロエを先頭に、一同はまっすぐに伸びる通路を全力疾走で駆け抜ける。

「この先で荷捌きのフロアにつながつてるわ！」

「あ？ いや、待て。それでこの見通しで反撃がないってのは、近接戦闘に特化して火力に劣る敵を迎撃するのなら、こんなまっすぐの通路を見逃すはずがない。強力な銃座をひとつ設ければ、近接戦闘に持ち込まれる前に敵を遠距離から蜂の巣にすることができ
る。」

それをしない、ということとは

「まずい！ この先で待ち伏せされてるぞ！」

だが、止める間もなく、クロエが通路を抜けてフロアに飛び出した。
た。

その瞬間、フロア各所に控えた兵士達が一斉射撃を開始する。

無数のライフル弾がクロエに襲いかかる。着衣のドレスが引き裂かれ、激しく痙攣するように小さな身体を震わせる。

倒れることも許されず、死の舞踏（ダンス・マカブル）を演じるクロエへ、更に強化外装骨格エクンスケルトンが動力機銃を叩き込む。強力なライフル弾より、なお一層の破壊力を秘めた機銃弾に襲われ、クロエの身体は簡単に跳ね飛んで、積み上げられた手荷物の山へと放り出された。

「クロエ君！」

「博士、いけません！」

飛び出そうとする博士を、少佐と軍曹がふたりがかりで強引に床に引き倒す。

「……結局、こうなりましたか」

「まあ、そういつまでも行き当たりばったりは通用せんわな」

単純にこちらの接近を阻止したいのなら、通路の出口に銃座をひとつ設ければ、それで済む。しかし、敵は確実にこちらを殲滅せんめつしたかった。少なくとも、火力の集中が必要と判断したのだろう。開けたフロアに火線を展開して待ち構え、まんまと飛び出してきたクロエに一斉射撃を加えてきた、と。

気がつけば、敵の発砲が止んでいる。伏せたまま、少佐はフロアの様子を探った。

ちよつとした小学校の体育館ほどの広さのフロアに、乗客の手荷物がいくつも山になって積みまれ、その上に荷崩れ防止用のネットが張られている。敵はその山々の合間に巧妙に銃座を設け、ちよつとした従深陣地を形成していた。クロエはそのど真ん中に考えなしに飛び込んでいったわけで、文字通り、射的的的となって十字砲火を浴びることとなったのだ。

銃声から察するに、敵の兵力規模は十数人、プラス装甲で覆われた金属体 貴重品保管庫とおぼしき分厚い扉エクンスケルトンの前に陣取っているのは、おそらく人間が中に入って動く強化外装骨格だろう。

もつとも、目の前にあるアレは、中世の鎧騎士をふた廻りほど大

きくしたようなサイズだ。 帝都 の技研で見た試作品は、牛小屋くらいの大きさはあったぞ。しかも、自力歩行すらできず、動くときは戦車に牽引させるといふ、もはや何がやりたいのかも理解に苦しむ代物だった。

確かに、あのくらいの手ごろな大きさで重火器のプラットフォームになる機動装甲装備があれば、インドア・スウィーブ屋内掃討でもかなり使い勝手がいだらう。 まあ、現に今、掃討されようとしているのは、こつちなわけだが。

ともあれ、いくら探しても緊張が緩んでいる気配がしない。まだ警戒しているのか。自分と軍曹を……？ それとも。

通路の出口手前で伏せつつ、クロエの身体が埋まっているであろう手荷物の山に目をやる。

「……どうでしょう」

「どうしようもあるかい」

半ばヤケ気味に吐き捨て、少佐は胸元に手を突っ込みシガレットケースを取り出して煙草をくわえる。

見事に進退窮まった。あの自爆娘のおかげで、このさまだ。バカには同情しない主義なのであの娘がどうなるかと知ったことではないが、引きずり廻された拳句、こんな敵のど真ん中で放り出されたこつちはたまらない。

くわえた煙草をそのまま噛み潰しかけたそこへ、軍曹から突っ込まれる。

「禁煙ですよ、少佐」

「……お前ね……」

この期に及んで律義にそんな指摘をする部下にあきれつつ、それでも素直にしたがって口許から煙草を外したのは、少佐自身、まだ「終わった」感じがしなかったからだ。

「軍曹、後方の敵に動きは？」

「特にありません。静かなものです」

戦力がこれだけ隔絶している以上、後は兵を前進させて残存兵力

を掃討し、戦果を確定させるだけのはずだ。勿論、素直にやられてやる義理もないが、このまま前後から挟み討ちで火力を叩き込まれてはこちらに打つ手はない。それで終わる話なのに、何故、そうしない？

少佐は自分の下で嗚咽している博士に目をやった。

「何ということだ……何という……」

この老人にもいろいろ訊きたい話はあるが、さて、この先、のんびり事情を訊く暇があるかどうか。

と、前方のフロアで兵士達が、慎重に遮蔽物の陰から姿を現す。

一部の兵士はこちらを警戒しているようだったが、大部分はクロエの埋まっている手荷物の山を囲むように展開する。いずれもすぐに発砲できるように、銃を肩付けにしてにじり寄るようにして前進している。

なるほど。やつらもまだ「終わった」とは思っていないわけか。

「軍曹、手榴弾」

「はい」

何に使うのかも訊かず、ビールの小瓶でも渡すように二発の手榴弾を手渡す。

「後方の警戒はいい。俺の合図でフロアに向けて撃ちまくれ」

「了解です」

自動小銃の弾倉マガジンを交換しながら、軍曹が頷く。

博士が不安げに訊ねてきた。

「……どうかしたのかね？」

「まだ『終わってない』ってことです」

さて、何が起きる……？

きりきりと高まる緊張を愉しむように、少佐はちいさく唇を舐め、手榴弾のピンを抜いた。保護レバーは握ったままなので、起爆ヒューズはまだ活性化していない。元々、ハイジャック犯程度の軽装備の敵を相手に、船内で使用することを想定していたので炸薬の量は減らしてある。防弾装備で固めた敵兵にどれだけ通用するか判らな

いが、猫だまし代わりくらいにはなるだろう。

状況次第でいつでも投擲なげできるように、壁を背にそろそろと身体を起こす。

兵士たちに続いて強化外装骨格エクソスケルトンが動き出す。正面をクロエのいる手荷物の山へと向け、肩に背負った武器庫ウエポン・ラックを開いて多弾倉のロケットランチャーを露出させた。

「おいおいおい！」

こんな船内であんな太い口径のミサイルを放てば、船殻を簡単にぶち抜きかねない。敵はそこまで脅えている　何に？　あの娘にか？

その時、手荷物の山から細い少女の腕が突き出された。

「棺つひよ！」

紛れもないクロエの声がフロアに響く。

「棺つひよ、こい！」

その叫びに応えるかのように、強化外装骨格エクソスケルトンの後方で貴重品保管庫の扉が吹き飛んだ。

次いで保管庫前に陣取っていた数人の兵士を弾き飛ばしつつ、何が飛び出し、クロエの埋まっている手荷物の山に突っ込む。

旅行カバンや中に収まる衣類などが、盛大に跳ね上がる。

強化外装骨格エクソスケルトンが、肩のランチャーからミサイルを一発発射した。たいした飛翔距離もなく着弾したミサイルは、まるまる残った燃料ともども爆発し、手荷物の山を爆炎に包む。着火した衣類がフロア中にばらまかれ、次々と周囲に引火した。

「バツカ野郎！」

熱風が少佐たちの元まで流れ込み、肌を灼く。強化外装骨格エクソスケルトンの乗員は、よくよくもって脅えきっているらしい。

急激に上昇した室温に、天井の消化装置スプリングラーが作動。消化剤を含んだ高圧水が辺りにぶち撒けられる。瞬く間に、フロアは煙けむりのような水煙に包まれた。

この気を逃さず、少佐はフロア内に滑り込んだ。さほど深い考えがあつてのことではない。だが、どのみちこちらの抜刀術は距離を詰めねば使えない。

消化剤の散布は短時間で止んだ。水煙が薄らぐ中、再びクロエの声が聞こえてくる。

「まったく……このドレス、せつかく気に入ってたのに」

見れば、燃え残った手荷物の山の上で、クロエがぼろぼろになったドレスをまとい立っている。

だが、あれだけの銃撃を受けながら、指一本欠けることなく、白く滑らかな肌には傷ひとつない。いつの間にかリボンを失った長い黒髪が消化剤で濡れそぼち、肌へとまといつく。

眼下の兵士達を睥睨するその貌かおは魔王のごとく傲岸で、墮天使のように美しかった。

「バケモノめ……」

小さくこぼしながら、しかし少佐の口許は沸き起るような得体の知れない愉悦感で歪んでいた。そうだ。こいつはあれくらいでくたばるタマじゃない。

そしてそのクロエの背後には、白く大きな棺ひつぎが直立している。クロエ達が乗船時、連絡船シヤトルから持ち込んだあの「棺」ひつぎだろうか。

「あんた達」「クロエは猫のようなその瞳を大きく睜みひらき、嗤わらうように叫んだ。

「こっちのドレスは凶暴よ！」

不意に背後へと手を伸ばし、掌てのひらを「棺」ひつぎの蓋に叩きつけた。

蓋の表面がいきなりシャッター式に開き、黒い鎧のようなものの中から出現する。

兜のない、首から下だけの鎧が背後から襲い掛かるようにクロエに覆いかぶさる。クロエを取り込み、喰らうかのように装甲パネル

が次々に閉じてゆく。装甲表面から突出する長い針のようなネジが自動的に旋回し、抉り抜くようにクロエの身体を鎧に結合してゆく。「あああああああああああっ!!」

歓喜とも苦痛ともつかぬ咆哮とともに、鎧をまとったクロエがその身を仰け反らせた。鎧、と言いつつも、均整の取れた長身とそのしなやかなフォームは、明らかに成熟した大人の女性のそれだった。そこへ兵士達が一斉に銃口を向ける。

少佐は躊躇わずに手榴弾を放った。兵士達とクロエのちょうど中間の位置で手榴弾は炸裂し、兵士達は発砲のタイミングを見失う。

同時に軍曹も発砲を開始。迂闊にその身を晒した兵士達を、正確にひとりづつ射殺する。

少佐も混乱状態に陥った兵士達の背後に廻り込み、抜刀術で次々に撫で斬りにし始めた。

狂騒状態に雪崩れ込むフロアで、ただじつとクロエだけを見つめていた強化外装骨格エクソスケルトンは、両腕の動力機銃の発砲を開始。大口徑の機銃弾が、鎧をまとったクロエに襲い掛かる。

だが、着弾より前にクロエの姿は掻き消えていた。

「バカね」

驚愕するように身じろぎする強化外装骨格エクソスケルトンの内懐で、クロエは背中を凭れて言った。

「そんな重いもの着込んでるから、のろまなのよ」

そしてその場でぐるりと身を翻す。その左腕からは、青白い鬼火のような燐光をまとった刀身が伸びていた。

と、強化外装骨格エクソスケルトンの胴体がずるりとずれ、胴体から真つ二つに輪切りにされて床に崩れ落ちる。

それを見て、恐慌状態に陥った兵士達が、統制も取れぬまま狂ったように発砲を始めた。

だが、軽やかに跳躍してその銃撃を避け、兵士達の背後へ廻って左腕の刀身で斬り捨てる。

そこから慌てて逃げ出そうとする兵士もいたが、即座に軍曹の狙

撃でヘルメットごと頭部を撃ち抜かれた。それを見て、手荷物で作った簡易陣地の中で身を竦ませる者の元には、少佐が飛び込んで白刃を振るう。

おそらく早い段階で指揮官を喪^{うしな}つたらしく、ついに統制の取れた戦術運動を回復できぬまま、ほどなくフロアにいた十数名の兵士達はたった三人の敵に殲滅^{せんめつ}されてしまった。

「なによ」

こちらを向く少佐の顔を見て、クロエはむっとして言った。

「開いた口が塞がらないって顔ね」

「開いた口が塞がらねえんだよ、バカ野郎」

ひどい脱力感を隠そうともせず、少佐が答える。

戦闘中は敵の動きにばかり気を取られてまともに見ていなかったが、「棺」^{ひつぎ}から出てきた鎧を装着したクロエの変貌ぶりには啞然とした。

背丈は少佐よりやや低いくらい。何らかの装甲とおぼしき表面処理に覆われつつも、女性的な艶やかなプロポーシオンを隠しもしない。洗練された美女には事欠かない 帝都 でも滅多にお目に掛かれないような見事なラインで、 同盟 圏ほど開放的ではない 帝国 成年男子としては目のやり場に困るほどだ。

少佐は端的に訊ねた。

「お前、大人か子供か、どっちなんだ？」

「なによ、女に面と向かって歳の話を訊くわけ？」

「そんなレベルの話をしてるんじゃない、ってのは判ってるよな？」
その問いに、クロエは小さく舌を出してそっぽを向いた。それを見て、少佐は真剣にこいつを殴りたいと思ったが、自重する。だがその仕草は、少女の姿の時よりむしろ幼くも感じられ、ますます持つて実年齢が判らなくなる。

いや、この際、こいつの実年齢が幾つかなんてのはどうでもいい。

「だいたい、何なんだ、その格好は？」

「これは……あたしの『棺』^{ひつぎ}よ」

豊かな胸許に手をあてたクロエが、どこか翳^{かげ}のある笑みで呟く。

「？ あの『棺』^{ひつぎ}の中身がそいつだったってのか？」

「……まあ、そういう解釈でもいいわ」

「解釈つて、お前な」

「クロエ君！」なおも問い詰めようとする少佐をさえぎり、博士が駆け寄ってきた。

「クロエ君、これが……これが君の今の本当の姿なのか？」

「いいえ、博士」クロエが哀しげに首を振る。

「もう、本当の私の姿なんてないんです。この『棺』を受け入れると決めたときから」

「バカな。責めを負うべきは、わたしであるべきなのに」
その時、不意に一発の銃声がフロアに鳴り響いた。

博士の痩せた身体がぐらりと揺れ、膝から床に崩れ落ちる。

軍曹が即座に自動小銃を構え、生き残っていた敵兵へフルオートで銃弾を叩き込んだ。

「博士！」

クロエが抱き起こそうとするが、博士の口からは多量の血が吹きこぼれた。内臓の、しかも動脈を派手に断ち斬られたか。地上ですぐに外科手術が受けられるならともかく、敵に制圧された船内では手の施しようがない。

喉を逆流した血が気管を冒すのか、ごぼごぼと喉を鳴らす。

「博士、ダメです！ 喋らないで！」

クロエが取り乱すように博士の傷口を押さえる。だが、左脇腹から侵入し、肺と臓器を傷つけたライフル弾は、心臓のすぐそばに子供の握り拳ほどの射出口を作っていた。クロエがいくら押さえても、出血は止まらない。

それでも必死で博士の傷口を押さえるクロエに、少佐はもうやめろ、と言いかけ、喉まで出かかったその言葉を呑み込む。

クロエへの同情からではない。何かひどく理不尽な苛立ちを覚えていた。

ついさっきまで、ここでヒトをコロしていたお前はどうした。自

動的に殺戮を重ねる自分を受け入れていたのじゃないのか。身近な人間が死にかけているくらいで、何でそんなにうるたえる。お前は「そっち」じゃないだろう。それではまるで「人間」じゃないか。

「……………」
だが、結局、その苛立ちを口にしなかった。それは、そもそも目の前のこの女に、自分が知らぬ間に何かを託しかけていたことに気付いてしまったからだ。

戦時任官の「やつつけ少佐」とはいえ、大戦中に上げた勲功からすれば、戦後も正規の出世コースに乗って 帝都 の陸軍省ビル内の安全で清潔なデスクと地方の連隊とを往復して、高級軍官僚として判りやすい立身出世の人生を目指すことも出来た。これまでの軍人生活で培ってきた貸しやコネを使えば、今からだって遅くない。

だが、それをせずに唯々諾々とこんな割に合わない火消し屋稼業を続けているのは、いくら上つ面を取り繕ったとしても、自分が平和な市井の生活に馴染めるとはとても思えなかったからだ。スウィッチが入れば自動的に殺戮を開始する自分のような人間が、街中で「誤作動」を起こせばどうなるか。

それを懼おそれながら、しかし自裁しようなどという殊勝な気持ちには露ほどもなれず、自動駆動で漂流し続けるその身に無批判に乗って、今もこうして目の前でヒトの死を何の感動もなく眺めている。

この得体の知れない機械仕掛けの娘も、自分と同じ人種だと感じていた。いや、わずかなりとは言え、そうあって欲しいと願う自分がいたということなのか。

だが、まるで「人間」のように半狂乱で死に逝く老人の身体を揺するクロエの姿に、どこかほっとしている自分もいる。

理不尽なのは、むしろ俺の方が……。

少佐はクロエの肩に手を置いた。

「もう、いい」

はっとクロエが顔を上げる。機械仕掛けのくせに、その両瞳は真

っ 赤に泣き腫れ、子供のように顔を崩している。

少佐はもう一度、繰り返すように言った。

「もう、逝かせてやれ」

クロエの腕の中で、すでに博士は琴切れていた。

第3甲板、船主部にある展望ホール 位置的には装甲ジャイロに吹き飛ばされた操舵室ブリッジと通信室の直下に当たる。

船主側三面を強化ガラスで囲まれたその場所で、クロエは目を閉じて腕を組み、ガラス壁に背を凭れていた。

透明度の高いガラスの向うは、超高度の夜空。吹きすさぶ高速気流ジェット越しの満点の星空は、地上で見るより激しく瞬いて見える。

襲撃直後には夜景を目当てにかなりの数の乗客が集まっていたはずだが、今は誰もいない。皆、管理のしやすい別のホールに集められているのだろう。

その照明あかりも消えた無人の展望ホールで、クロエは静かに待ち続けた。

と、ホール後方両脇の扉が吹き飛び、一団の兵士達が雪崩マシーナリイ込む。最下層甲板にいた者たちとは違う、手足や胸部の異様に太い機人兵マシーナリイたちだ。

数人の機人兵たちは壁に沿って素早く展開し、クロエを包囲する。最後にひよろりとした長身の機人マシーナリイがフロアに姿を現した。鈍い金属製の薄い装甲帯を包帯のように全身に巻き、貌かおは表情のない白いマスクで覆っている。赤毛の長い髪は、後ろで結んで背中に流している。

男は兵士達を従えてクロエの正面に立つと、腰の後ろに挿した二刀の長刀を一気に抜き放った。可聴域を越えた高周波振動が共鳴し、微かに空気が震えている。少佐の軍刀サイベルと同じ高周波振動刀、しかも出力はけた違いに強力な代物だ。機銃弾の直撃にも傷ひとつかなかったクロエの身体でも、どうなるか判らない。

だが、クロエは動ずるでもなく、薄く目を開いた。

「遅いわよ、あんた達」クロエは告げた。

「待ちくたびれて、あくびが出そうよ」

「 始まりは三〇年前、若手研究者のひとりでしかなかった博士に『組織』が接触した辺りからかしら」

「『組織』？」

「当時は 財団ファウンデーション と呼ばれていたそうよ。今は 大聖堂カテドラル と名乗ってる。まあ、連中にとって名前なんてどうでもいいのよ。所詮は記号でしかないし。」

彼等は『原書』ザ・ペーパー と呼ばれる技術情報を、俗世の技術者や政治家、企業家に提供して、技術開発や産業構造を自分達の望んだ方向に誘導しているの」

「よく判らんな。技術を持つてるんなら、自分達で造ればいいだろうに」

「彼等は情報として持っているだけなのよ。それが何なのか、事によつては何のための技術なのかも理解できていない。」

例えば『合成樹脂』プラスチック という言葉があるとして、それが何なのか、どんな物理特性をもつのかを理解できなければ、『合成樹脂』プラスチック を使用した技術体系はまるごと理解も再現もできない。

だから、現実の技術者や産業基盤を育んで、現場の知識や経験を元に解析をしなければ、『原書』ザ・ペーパー は使い物にならない。

大聖堂カテドラル が『原書』ザ・ペーパー の解析を求める分野は多岐に渡って、帝国以外の国々も対象となつているのだけど、その内のひとつのプロジェクトが博士の手掛ける機械生体学 機人化技術だったのよ。

やがて時を経て、帝都 の帝立大学に設けられた博士の研究室で、あかし達は出逢った」

「あかし達？」

「あかしと、やがて後に爆発消失した研究所で副所長を務める男女ふたりの研究者 どちらもあかしのライバルで、大切な親友だったわ」

「……………」

クロエが凭れていたガラス壁から背を離し、ゆっくりとフロア中央へ向けて歩き出す。

機人兵達は完璧に同調した動きで、一斉に銃を構えて腰を落とした。

と、足に履いたブレード式のローラーが駆動し、ダッシュを開始。耳触りなモーター音の重奏を奏でながら、円を描くようにクロエとの距離を詰めてゆく。

クロエもまた床を蹴って走り出すが、機人兵の包囲の輪もそれに合わせて移動する。

やがて、機人兵達は手にした動力機銃を、次々に発砲し始めた。「くっ……！」

動力機銃はライフル弾を使用した小型の物だったが、それでも人体を破壊するには充分以上の能力を有している。流れ弾が当たれば機人兵自身もただでは済まないはずだが、高速移動する互いの位置を正確に把握しているのか、躊躇うことなく銃撃を重ねてゆく。

クロエの身体に着弾した銃弾が、赤い火花を放って弾ける。いずれも貫通することなかったが、運動エネルギーまでは殺せず、着弾ごとに殴りつけられたように体勢を崩す。

「こいつら……！」
苛立ったクロエが距離を詰めようと近づけば、機人兵達はさつと後方に下がり、彼我の距離を維持し続ける。

その間、先刻の二刀の男は、じっとクロエの動きを睨んで動かない。

やがて、クロエの動きが鈍ったのを確認した機人兵達が、一斉に投射機でワイヤーを放つ。

「！」
あっという間にクロエは全身をワイヤーで絡め取られてしまう。そこへ、いきなり二刀の男が床を蹴り、上空からクロエに襲いか

かった。

「あたし達はどこへ行くのも一緒に、いくつもの共同研究を成功させていった。」

「ただどやがて、博士の活動が政治的な側面を帯びるようになっていった時、あたしは博士の秘書的な仕事を担当するようになり、ひとり研究の現場を離れることになった。」

「それは研究者として限界を感じていたこともあったけど、彼が私ではなく彼女を選んだから、よくある話よね。」

「その内、あたしは カテドラル 大聖堂 にスカウトされた。かつて博士に接触したのと同じ、俗世との接点となるエージェント フリーチャー 伝道師 として。」

「そしてそこで、あたしは取り返しのつかない過ちを犯してしまっ
た」

「……つたく！」

舌打ちしたクロエは全身を力ませると、絡み付くワイヤーを一気に引き裂いた。

「うざい攻撃してんじゃないわよ！」

ワイヤーの一本を？むと、その先にいる機人兵ごと力づくでひっぱり襲撃軌道にある空中の二刀の男に叩きつける。

二刀の男は、目にも留まらぬ高速の剣技で機人兵の身体をばらばらに解体し、血煙とともに床に着地する。

それをわずかに身を引いて避けたクロエは、着地したばかりの二刀の男に蹴りを叩き込んだ。

避ける間もなく、二刀の男は後方の壁面にふっ飛ばされ、背中から壁を突き破る。

「次！」

振り返ったクロ工へ機人兵が銃撃を加えようとするも、その時には既にクロ工の姿はない。

「あんだ達は」

耳元で囁くその声に振り返ろうとするその機人兵は、自分の胸元から青白い燐光を放つ刀身が伸びていることに気づき、マスクの下で驚愕に表情を歪ませた。

「どいつもこいつも、動きが鈍すぎる。」

悪いけど、恨むんなら、そんな性能であたしを殺れるだなんて思い込んであんだ達を送り込んだバカを恨んで頂戴」

言い捨てると、左腕の刀身を一気に引き抜き、返す刀で目の前の機人兵を真っ向から斬り捨てた。

フリーチャー

「伝道師 として活動するようになっていたあたしが、研究所副所長となった彼と久しぶりに再会した時、彼の精神は既に壊れ始めていた。」

ひとつは戦争が本格化して、短期間で次々に研究の成果を求められるようになったこと。研究所の名目上の責任者は所長である博士だったけど、博士はますます 帝都 での政治的活動に没頭するようになっていて、現場の統括者として彼の担うべき責任は重くなっていた。

加えて、戦争の激化に伴って、現場では人体実験などの倫理規範も緩みがちで、平時なら問題視されるような実験が当たり前のように繰り返されていた。

そして何より、妻となった彼女が出産を境に身体を悪くし、産まれた子供も重度の未熟児で大きくなってからも生命維持装置を必要な身体だったこと 彼はそれらの解決策を、内蔵を含む全身機械の技術に見いだそうとしていた。

そうしたことが重なって、その頃の彼はひどく危うい心理状態だった すべては後付けで気付いた理由でしかないけれど。

なのに、彼がそんな状態だったことをわたしは気付きもせず、その彼に『棺』を与えてしまった……」

更に次の機人兵へ向かおうとするクロエへ、まっすぐに二刀の男が突っ込んできた。

少佐の太刀筋よりもなおいっそうの機械的な加速フィーストの加わった二刀の剣が、クロエに襲い掛かる。生身の人間なら太刀筋を読むより先に膾なまに斬り刻まれていたであろう剣風を、薄皮一枚のぎりぎりの距離でかわす。

だが、男の猛攻は止まらない。

左腕の刀身で反撃を試みるが、凌しのぐのが精一杯だ。一刀ならまだしも、もう一刀が常に予想外の角度から襲ってくる。標的に対して直線的に襲いかかる少佐の太刀筋とは違い、刀身を体の背後に隠しながらの太刀捌きは、どこから襲ってくるのかこちらから読めない。そこへさらに二刀が相互に入れ違って幻惑するような動きまで見せ、一瞬たりと気が抜けない。

「くっ……こおんのお……っ！」

高速で疾駆する二刀によって編み上げられた、緻密な襲撃軌道その隙間をこじ開けるように、クロエは左腕を突き入れようとする。

が、その瞬間、振り上げたその腕が、逆に後方へと引つ張られた。ワイヤー……！？

背後から打ち込まれた機人兵のワイヤーが、左腕に絡まっている。クロエの膂力りょりよくであれば、振り切るのもたやすい。だが問題は、発生してしまったこの刹那の対応の遅れであり、眼前の二刀の男がそれを見逃すはずもなかった。

「！」

喉と心臓を正確に照準し、音速を越える突きがクロエめがけて襲いかかった。

「カテドラル大聖堂 は技術情報だけでなく、いくつかの遺物 彼等が『マスターピース原器』と呼ぶものを持っていて、高度な解析能力を持つに至った研究機関に、それを貸し与えることがあったの。」

この『棺』もそう。機人化技術の育成自体、この『棺』の解析を最終目標とするプロジェクトだったから、彼の下にそれを届けるのは、カテドラル大聖堂 にとってもひとつの成果を意味していた。

そして『棺』を得た彼は、それを解析して得た情報を元に、次々とめざましい成果を挙げ始めた その背後で、自分の妻と息子を含むおびただしい数の人体実験を重ねていたことに、私たちが気づくのは大分後になってからだったのだけだ。

カテドラル大聖堂 への報告書に生じた矛盾をきっかけに、査察官が送り込まれたものの失踪。事態に気づいた私たちは、『棺』奪還のために執行部隊を率いて研究所を強襲した。

だけど、全身機人化した十体の戦闘用機人 マシーナライ・ゴッド機神 を率いた

彼の前に、私たちは逆に返り討ちにあい、壊滅的打撃を受けた。

彼は カテドラル大聖堂 の追撃を振り切り、彼に従う研究者や機人化した妻子、マシーナライ・ゴッド機神 達を連れて西方辺境領の砂漠の彼方に姿を消してしまった」

自分めがけてまっすぐに突っ込んでくる二刀の剣を、クロエはとっさに下から蹴り上げた。

二刀とも刀身が半ばから折れ、宙を舞う。

すかさず強引に左腕を突き出すと、クロエは男の貌かおをその手にわし掴んだ。

「おおおおおおおおおおおおっ！」

獣のような咆哮とともに、背後からワイヤーを絡ませる機人兵ともども船主側のガラス壁めがけて突進する。

男は己の貌かおを？むクロエの強靱な掌てのひらから逃れようとともがくも、果たせず、そのまま分厚い強化ガラス壁に後頭部を叩きつけられた。正面から突っ込んでくる渡り鳥の直撃（バード・ストライク）にも耐え得るとされた強化ガラスの一面に、蜘蛛の巣のような亀裂が一気に走る。

が、男の頭部はその衝撃にも耐えたのか、苦しげに右手を持ち上げると自身の貌かおを掴んだままのクロエの手首を握りしめた。

「……………」

クロエは無言で左手をひねった。鈍い音ともに頸骨をへし折られた男の身体から力が抜ける。手を放すと、ガラス壁に血の痕を残しながらその場に崩れてゆく。

と、その背後、ひびの入ったガラス壁の向うで、凶暴な動力機銃の銃口がこちらを睨んでいた。

「……………装甲ジャイロ!？」

とつさにその場を離れようとし、身動きが取れないことに気付く生き残った機人兵が、両手両足にしがみついていた。

「あんだ達……………!」

装甲ジャイロが、視界を灼く強烈なサーチライトの光を浴びせる次いで、多銃身の動力機銃が羽虫のような唸り声とともに火を吹いた。

「研究所襲撃で重傷を負ったあたしは、カテドラル大聖堂が保有するもうひとつの『棺かぶつこ』の被験体として選ばれ、今のこのあたしになった。それから五年経って、カテドラル大聖堂の情報網が、遂にあの男が潜む根拠地の所在を掴んだ。

当然、あたしはあの男を殺すため、西方辺境領を目指そうとした。けれど、ふたつ目の『棺かぶつこ』を失うことを恐れた上層部は、あたしの身柄を拘束しようとしたの。

だから、あたしは カテドラル大聖堂 を抜けた。この アリーズ（ふね）

を襲った連中は、あたしを抹殺し、『棺』を取り戻そうとする
カテドラル
大聖堂 の執行部隊ってわけ」

「で、同じくそいつらの情報を得た博士は、同行を申し出て、お前はうかうかとそいつに乗っちまった、と」

「博士は博士で、自分の研究や野心が若い私たちの人生をねじ^まくってしまったのだとひどく自分を責めてらしたわ。だからあたしに同行して、最後まで見届けたいと言って……あたしはそれを拒否できなかった」

「それに普段の子供の姿では、旅を続けるのもいろいろ面倒だからな」

「……まあ、そんなところよ」

頷くと、クロエは静かな、だが決意に満ちた厳しさで告げた。

「あたしは、ケリをつけるって決めたの。そのためにあの男を殺す。あの男の作り上げた組織も、機人たちも何もかもぶっ壊して更地にする。そこからしか、何も始められないって、そう思うのよ」

「錯覚だよ、そんなものは」少佐は冷ややかに指摘した。

「くだらねえ。まったくもって、くだらねえ。」

お前の言ってることは、ただの八当たりじゃねえか。

いいか？ 死んだ奴は甦らない。去っていった奴も帰ってこない。壊れたものは元へは戻らない。喪^{つしな}ったものは取り戻せない。ねじ^まくったものは、どんなに逆方向にねじ^まくればようが、やっぱりねじ^まくったままだ。

結局、そこから始めるしかないんだ。終わっちまったこの場所から、終わっちまった自分を受け入れて生きてくしかないんだ。

それが判らないほど、ガキじゃねえだろ」

「そうかもしれない」クロエは苦笑して頷いた。

「でもね、あたしの中ではまだ何も終わってやしないのよ。今でも血が流れてるの。今でも熱を帯びていて、今でも痛むの。こんな機械の身体に乗り換えても、何人この手で殺しても、痛みは少しも収まらない。

五年前のあの時、あの瞬間に、いつだって引き戻される。だから、この手で終わらせるの。何もかも。何もかも。

あたしが何かを始められるのは、きつとその後からしかないのよ」

「……………」

しばらく無言でクロエを眺めていた少佐は、やがて口許だけを歪ませた。

「……………そうか。お前はまだそこにいるのか。

いいさ。行けよ。お前の進みたい方向に進んで、殺したい奴を殺せばいい。そんなもので、その痛みとやらが収まると思うなら、どこへなりと行って誰なりと殺せばいい。そんなもので、何かが始まると思えるなら、気が済むまでぶっ壊せばいい。

結局、手前の足でたどり着くしかねえんだよな、ここへはよ」

「……………行くわ……………」

「ああ。じゃあな」

分厚いガラス壁が無造作に砕かれ、大口径の機銃弾が展望ホール一面にぶち撒けられる。

しがみついた機人兵どもともども直撃を喰らったクロエは、後方の壁面までぶっ飛ばされた。

ガラス壁だけでなく、着弾した床や調度品なども、機銃弾の巨大な運動エネルギーを受け留めきれず、微細な破片を辺りに撒き散らして弾け飛ぶ。乗客たちの空の旅の無聊を慰めるべく、帝国各地の職人たちによって丁寧に設^しえた高級な調度品やバーのカウンターなども、等しく無惨な残骸へと帰されてゆく。

やがて銃撃で脆くなったガラス壁が、内外の気圧差に耐え切れず、外へと砕け散った。与圧されたホール内の空気とともに、破碎された破片類や機人兵の屍体の断片などが、まとめて船外に吸い出される。

それを避け、一旦わずかに後方に下がった装甲ジャイロは、機位

を変えると、更に銃撃を加えて執拗に展望ホールの掃討を重ねる。サーチライトの強力なビームでホール内を舐めつつ、形在るものすべてに破壊をもたらしてゆく。

と、湯水のように金色の葉莢をばら撒いていた機首の動力機銃が、不意に停止した。

「？」

動力機銃のマシントラブルかと、パイロットが機内から強制排莢を試みる。反応がない。もう一度、レバーを引く。反応なし。そこで機首の動力機銃だけでなく、機体全体の反応がなくなっていることに気付く。

『 捕まえたわ 』

予圧服内のスピーカーから、クロエの囁きが流れ出す。

驚愕するパイロットが貌かおを上げると、そこに長い黒髪を吹きすさぶ氷点下の大気流になびかせたクロエの姿があった。

『 バカね。今のこのあたしの前でデータリンクなんて使うから 』

猫のように細めたその瞳が朱く輝き、嗤わらうその貌かおは紛れもなく獲物を捕らえた肉食獣そのものだった。

展望ホールで襲いかかってきた機人兵たちの高速で統制の取れた襲撃行動の裏には、相互の位置や行動予測の情報をやり取りするデータリンク・システムがあった。「棺」の電子戦制圧力を知る彼等は、クロエの 大聖堂 離脱までに使用されていた暗号をすべて破棄していた。代わりにより強度の高い新暗号を導入し、小さな回路一つひとつまで念入りに封印を施して事に臨んでいた。

だが、「棺」を身にまとったクロエは、戦闘を行いながら、リアルタイムで周囲を飛び交う電波情報を収集、解析し、データリンク暗号を喰い破った。

更に、クロエの身体に取り付いた機人兵たちからの呼出し（コール）を受けた装甲ジャイロが、受信確認のコールを返すために回線を開いたことに気づき、すかさずそこへ潜り込む。それでも、本来、制御系のシステムは通信回路とは切り離されており、機体制御までは奪えないはずだった。だが、機体整備のために機外から遠隔診断を行うための裏口が存在したことが、すべてを決した。小さくか細い突破口だったが、そこからクロエは装甲ジャイロの機体制御を強奪したのだ。

装甲車輛と機人との実用レベルでの接続運用を、有線であろうやく実現したばかりの俗世の技術水準とはまるで別次元の戦いだった。

恐慌状態に陥ったパイロットが、手近のレバーやスイッチを慌てていじるが反応はない。

一方、クロエはフロアの奥から窓際までを助走として駆け抜けるのと、装甲ジャイロ目掛けて空中にその身を躍らせる。一万を越す高度もものともせず、凍てついた夜空をしなやかに飛翔して装甲ジャイロのキャノピーに取り付いた。

「!?!」

拳の一撃でキャノピーをぶち破り、パイロットと操縦席シートを結ぶハ
ーネスをひきちぎると、与圧服の胸倉を?む。

「邪魔よ。どきなさい」

そのままパイロットを機外に放り出す。悲鳴を上げる間もなく落
下してゆくパイロットを気にも留めず、クロエは操縦席シートに滑り込ん
だ。

目視による計器チェックと自動診断プログラムを走らせるのを同
時にこなし、機体状況を手早く把握する。

そこへ、事態に気付いたもう一機の装甲ジャイロが急行してきた。
小さく舌打ちすると、正面の操縦桿サイクリック・スティックと右脇の出力桿コレクティブ・レバーを握り、機体
を思い切り降下タイプさせる。

そこへ、敵機が動力機銃で撃ちかけてきた。ほんの一瞬前まで機
体があつた空間を銃弾が引き裂く。

間一髪でその攻撃を避けたクロエは、ゴンドラの下をくぐつて
アリーズの背後に逃げ込んだ。このまま振り切るにせよ、空中戦ドックファイト
を挑むにせよ、まずは上昇して降下タイプで失つた位置エネルギーを取り
戻す必要がある。

出力桿を押し込んで、スロットルを開く。高圧過給機スーパーチャージャーが高々度の
希薄な大気から酸素をかき集め、エンジンに送り込む。原型となつ
た俗世の機体から換装されたエンジンが、爆音とともに膨大な出力パワー
を捻り出す。

上昇を始める機体は、しかしジャイロ機の構造上、回転翼ローターの回転
方向に自然と引つ張られている。加えて高速気流内の荒つぽい風の
動きに、機体が振り廻されそうになる。せわしなく操縦桿サイクリック・スティックと足許に
ある左右のラダーパネルを操つて、機体のバランスを保つ。

クロエ機を追つて、敵機もアリーズの船体を廻り込んできた。
再び向背から銃撃サイクリック・スティック 操縦桿を捻つてぎりぎり

流れ弾がアリーズの気囊部分表面に突き刺さる。不燃性のガス
が使用されていることと、巨大な気囊部分の内部は無数の子気囊セルに

分割されていることもあり、このくらいの被害では航行に支障はないだろう。

だが、このまま アリーズ のそばで戦闘を続けることの危険性に気付き、クロエは再び舌打ちした。

そこへ、けたたましいブザー音　ロックオンされた!?

クロエは自機の貧弱なECM機能に「棺」^{（あき）}の解析能力を上乗せして、敵機の照準電波を攪乱する。同時に機体を荒っぽく振り廻し、敵機の空対空ミサイル(AAM)の攻撃可能範囲から逃れようとする。

元々、コックピットの与圧もされず、キャノピーには大穴が開いている。吹き晒しのコックピットに、容赦なく冷たい高々度の大気が流れ込む。生身の人間なら低酸素症か体温低下で、まっしぐらに冥界へと引きずり込まれているところだ。

加えて激しい機動にコックピット内で身体を左右にぶつけながら、それでもクロエは機体を操って後背の敵機を振り切ろうとする。

しかし、執拗に喰い下がる敵機を振り切れない。

玲瓏^{（れいろう）}と輝く月下の空を、二機の装甲ジャイロは激しく舞い踊る。

「……………!」

クロエは出力桿を全開(MAX)に押し込んだ。ローターの回転方向にスピンしようと暴れる機体を、ラダーパネルでなだめつつ、アリーズ の船体に沿って急上昇　アリーズ の稜線を越えるや、出力を絞って降下^{（ダイブ）}しつつ強引に機体を反転させる。

その間に空対空ミサイル(AAM)を発射モードへ　弾頭の赤外線探知器(IRシーカー)に液体窒素が吹き付けられる。つめたく冷やされたセンサーが、性能限界ぎりぎりまで感度を引き上げられる。

クロエ機を追って、敵機も　アリーズ の稜線を越えた。

「……………捕まえた!」

射撃用の短距離照準レーダーが敵機を捕捉^{（ロックオン）}。躊躇わず、クロエは空対空ミサイル(AAM)の発射ボタンを押し込んだ。

機体から切り離された空対空ミサイル（AAM）は、ロケットモーターに着火。射撃レーダーの指し示す敵機目掛けて飛び出してゆく。続けてもう一発。

敵機も強引な機動でクロ工機の照準電波から逃れることに成功。だが、空対空ミサイル（AAM）は、既に母機の照準レーダーによる初期誘導から赤外線探知器（IRシーカー）による終末誘導に移行している。

迷うことなく自機へと突っ込んでくる二発の空対空ミサイル（AAM）に対して、敵機が砲熱源をばら撤く。闇夜に輝く砲熱源を追って、一発の空対空ミサイル（AAM）が軌道を歪める。だが、二発目の空対空ミサイル（AAM）は砲熱源には引つ掛からず、冷たい超高度の夜空を背景に二発のエンジンから眩い赤外線を放ち続ける敵機へとそのまま突っ込んだ。

爆散 月夜に閃く敵機の最期を横目に認めながら、クロ工は操縦桿を大きく傾けてアリーズから離れてゆく。
装甲ジャイロの航法機器が、近くの空域に無線標識を感知している。間違いない。敵の母艦はそこにいる。

アリーズ から離れてほどなく、無線標識ヒトコンの指し示す方角へしばらく飛ぶと、やがて暗灰色の飛行艦が見えてきた。大聖堂カテドラル 執行機関の空中駆逐艦だ。正面投影面積の小さな単胴型の気嚢部。軍用の分厚い高張鋼板に覆われた鋭角的なフォルムで、艦体各所にハリネズミのように対空銃座が設けられている。

と、対空火器が一斉に火を噴き始めた。アイスキャンデーのような輝きの尾を曳いて、曳光弾が無数に襲い掛かってくる。

クロエは機体を激しく振り廻してそれを避けつつ、瞳の光彩を朱く輝かせて、駆逐艦DESTROYERの通信回線から射撃管制システム、無線誘導システム（トランスポンダ）に至るまで、ありとあらゆる手段を用いて電子的制圧を試みる。

だが、敵も「棺ひつぎ」の能力を知っているためか、なかなか隙を見出だせない。

焦るクロエのそばで砲弾が炸裂した。襲い掛かる鋼鉄の暴風を少なからず浴びながら、それでも速度は落とさない。近づくにつれて炸裂する砲弾の数が加速度的に増えてゆく。砲弾の破片が激しく機体を叩き、ドラムのような激しい打撃音が鳴り響く。

「……………っ！」

瞳の輝きをさらに強め、敵艦の発するあらゆる電磁波、信号波の解析と電子戦攻撃を加速させる。

突破口は……………どこ！？

その時、ゴンドラ下部に配置された動力銃座のひとつが、悲鳴のような信号波シグニチャーを発して発砲を停止した。機関部が焼き付いて、排莖不能に陥ったのだ。

それによって生じた射界の死角に、すかさず機体を割り込ませる。減速は一切せず、その死角に沿って突っ込み、駆逐艦DESTROYERのゴンドラの真下を潜り抜ける。

一瞬でそこを通過したクロエ機が、不意にバランスを崩した。そこを捉えて動力銃座の砲火が集中。瞬く間に機体を穴だらけにされたクロエ機はすぐに火だるまになり、あっという間に爆散した。

夜空に閃いて散った装甲ジャイロを見下ろしながら、クロエは安堵の吐息をついた。

アリーズの展望ホールで襲ってきた機人兵から奪ったワイヤーを使い、駆逐艦のゴンドラから伸びるアンテナにぶら下がっている装甲ジャイロがゴンドラの下を通過したその一瞬の隙について、このアンテナにワイヤーを引っ掛けたのだ。

クロエはそのワイヤーを器用によじ登ってアンテナに取り付き、そのままアンテナ伝いにゴンドラの艦殻に張り付く。フリークライミングよろしく、握力と柔軟な全身を駆使して、ほんの僅かな艦殻の突起物を頼りに移動する。

やがて艦外出入用の分厚い気密ハッチを見つけ、あっさりと電子ロックを解除して艦内に侵入した。

ハッチをくぐり抜け、艦内通路に降り立ったクロエを、けたたましい艦内ブザーが出迎える。

『C24ハッチに外部から侵入者！ 繰り返す、C24ハッチに外部から侵入者！』

総員、武装して迎撃せよ！』

「……………」

歪んだ声でがなりたてる艦内放送のスピーカーに続いて、軍用ブーツの固い靴底で金属製の床を蹴る音がまとまって近づいてくる。

艦内に残った乗員達で編成された急拵えの陸戦隊だろう。無論、今のクロエにかなう相手ではなく、つまりこれから始まるのは一方的な虐殺に過ぎないということだった。

クロエは深く息を吸い、瞳を閉じた。

どこか痛みに耐えるように眉を顰め、大きく息を吐く。
そして駆け付けた陸戦隊の兵士達は、そのわずかな残りの人生の間に、朱い瞳を輝かせた黒髪の鬼神が修羅と化すその様を目の当たりにすることとなる。

ブリッジ
艦橋の金属製のドアが叩き割られ、内側へと吹き飛んだ。

全身を赤黒い返り血で染め上げたクロエが、幽鬼のようにゆっくりと足を踏み入れる。

「ようこそ、クロエ女史」

ブリッジ
艦橋にはただ一人、白いスーツ姿の青年が立っていた。

「お久しぶりです　また派手にやったみたいですね。まったく、貴女はどこへ行っても滅茶苦茶だな」

いかにも育ちの良さ気な細身の青年で、すつきりとした貌立ちに
険のない朗らかな表情を浮かべて苦笑している。

クロエはその貌を睨みつつ、訊ねた。

「ロアン・ロイ……あなたなの？」

「ええ、どこかの誰かがいきなり仕事を放り出して逃げ出すものだから、無理矢理、理事を押し付けられました。それで最初の仕事がこれですよ。まあ、貴女が逃げ出したくなった気持ちも、判らないじゃありませんかね。最年少の理事なんて、ご老人方の体の良い、使い走りだ」

「……あたしは、あの男を殺しに行くのよ。　カテドラル　大聖堂　に楯つこう
つてわけじゃない」

「どの口が言いますかね」ロアン・ロイはさすがに表情を顰めた。
「そもそも事の起こりは、貴女がああ男の正体を見抜けずに入れ込んで、まんまと『棺』を奪われたことから始まっているわけじゃないですか。」

それで今度は、そんな身体になってまで、昔の男の下に馳せ参じようだなんて、ただだけダメな女だって話ですよ。一回殺されか

「かっても、まだ惚れてるんですか？」

「そんなんじゃないわ」

「そう思ってるのは、貴女だけですよ。一度、客観的にご自分の振る舞いをよくご覧になった方がいい。まあ、そういう忠告を素直に聞いてくれる女性じょせいじゃないってのは、よく存じてますけどね。これでも貴女の部下だったわけですから」

「あたしも、あんたがいつも一言余計な口をきく部下だったってことをようやく思い出してきているところよ」

「それはまた、汗顔の至りって奴ですね」

とぼけた口調で答え、にっこりと笑う。

「ロアン……」そんなロアン・ロイの姿を冷ややかに眺めながら、クロエはストレートに訊いた。

「あんた、何しにきたの？」

「勿論」ロアン・ロイはいつそ爽やか笑顔で答えた。

「貴女を殺しに来ました。死んでください」

「イヤよ」クロエはきっぱりと拒絶した。

「じゃあ、その『棺かひ』を返してください」

「それも、イヤ」

ロアン・ロイはこれみよがしに深々と溜息を付いて見せた。

「もう、自分勝手な事ばかり言わないでくださいよ。というか、あなたの身体は、もはや組織の貴重な『資産アセット』だって自覚、ないですよ？」

「別に望んでこんな身体になったわけじゃないわ」

「私が申請して、評議会に認めさせたからですよね」

あっさりとロアン・ロイは言い放った。

「だって、貴女のような経験豊富なフリーチャー伝道師に、あのままおとなしく死なれても困りますから。実際、その後も理事にまで昇進して、辣腕を奮われてたじゃないですか。これでも上司として尊敬していただくんですよ。」

……まあ、相変わらず貴女の無茶の後始末ばかり押し付けられる

のには、閉口してましたけど」

「何が言いたいの、あんた？」

「貴女のやることなすこと、無茶苦茶だつて話です」ロアン・ロイは頷きながら言った。

「だつてそうじゃないですか。『棺』^{かひつ}をあの男に奪われたことの件はさつきも言いましたけど、それであの男を殺したってだけならわざわざ組織を抜ける必要はないわけですよ。どうせ彼の造つていゝる組織とは、大聖堂^{カテドラル}はいずれ決着をつけざるえないわけですし、それこそ、その陣頭指揮を貴女が執ればいいわけじゃないですか。

評議会のご老人方の制止も、あくまで『時期尚早』^{とき}って話なだけなのは、貴女もよくご存知なはずですよ。

判らないなあ。本当に今度ばかりは、貴女の考えてることがよく判りませんよ」

「ロアン・ロイ……」クロエは、露骨に吐き気を催したかのように貌^{かお}を歪めた。

「あんた、判つてないわ いや、判つてるくせにとぼけるのはやめなさい」

「何の話です？」

「あんたが老人どもの命令で、あたしの部隊を使つてしでかしたことを、あたしが気付いてないとも思つてるの？」

「あれ、ばれてました？」

ロアン・ロイは、悪びれた様子もなく破顔した。

「でも、あの時にはもう僕の部隊だつたんですから、貴女にいちいちお伺いする必要はありませんよね？」

それに、ひとつ誤解がありますよ。あの作戦はご老人方から命じられたんじゃないやありません。作戦の発起段階から僕が企画を立てて、評議会の承認を経て、僕が指揮して最後まで完璧に作戦通りに遂行しきつたんですよ。あの街を地上から消し去るに至るまでね」

不意にロアン・ロイの笑顔に、うつすらとした酷薄な翳^{かげ}がさす。

「貴女はずっと僕の憧れの上司でした。技術^{テクノロジー}への深い理解と知性、

フリーチャー
伝道師 としての豊かな経験、組織人としての鋭い洞察力と深い
思慮、何よりも果断で素早い決断力と行動力 貴女は僕にとって
組織人として鑑かがみでした。

「だけど、唯一にして、致命的だったのは、あの男への情に溺れた
ことだ。それが、貴女をくだらない、その辺のどこにでもいる『女』
にしてしまった。本当に、本当に、最悪だ！」

「だから、僕がせつかく機械の身体にしてあげたのに、それでやる
ことがあの男の下へ走ることでですか？ 信じられません。本当に無
茶苦茶な女ひとだな、貴女は！」

「ロアン・ロイ……」徐々に感情を顕あらわにしはじめたかつての部下に、
クロエは冷ややかに告げた。

「あたしはあんたのママじゃないわ」

「当たり前だ！」不意に激しく声を荒げた。

「お前みたいなのと つ！？」

「言いかけ、口をつぐむ。それから、いまいましげに睨むと、ロア
ン・ロイは小さく息を吐いて提案した。

「無駄を承知でお伺いしますが、戻られるつもりはありませんか？」

「ないわ」クロエは即答した。

「あたしはね、あの男を殺したいってだけじゃない。あんたも、あ
んたみたいな毒虫を好きなように這い廻らせる組織にもうんざりな
のよ」

「……毒虫、ですか……」

「ロアン・ロイの口許がいびつに歪む。

「ロアン・ロイ、こちらからもひとつ訊くわ。

「なぜ、こんなやり方で アリーズ を襲ったの？ あたしと『棺ひつぎ』
を取り戻すだけなら、こんな派手なやり方じゃなくてもよかった。

「一般市民を巻き込まず、部隊の損害も最小限に留めようと思えばや
れたはずよ」

「ああ、それは勿論、万が一、確実な抹殺に失敗したとしても、こ
の高度で放り出せば、いくら頑丈な貴女の身体でもさすがに持たな

いでしよう。

それに

ロアン・ロイは目を細め、薄く嗤った。

「貴女が一番嫌がるやり方ですから」

その貌へ、クロエはいきなり殴りかかった。

クロエの拳はロアン・ロイの貌をすり抜け、背後の壁面に埋め込まれた装置を正面のレンズごとぶち抜いて叩き壊す。

ロアン・ロイの姿が掻き消すように消失した。

次の瞬間、艦全体を叩きつけるような衝撃が襲った。

待機高度三五〇万の静止軌道上から、この作戦に参加するため
攻撃可能高度の上空一五〇万まで降下してきていた カテドラル 大聖堂 の対
地攻撃衛星は、内蔵する核融合炉から引き出した 帝国 の大都市
数十個分に達する莫大なエネルギーをビーム発振機に注ぎ込み、荷
電粒子の光の槍を大気の下にめがけて打ち下ろした。

放たれた荷電粒子ビームは、DESTROYER 駆逐艦の艦体気囊部分の中心軸を走
る竜骨の真中を正確に打ち抜く。 ジェット 高速気流に乗って高速に移動する
DESTROYER 駆逐艦の位置を、軌道上から正確に捕捉するだけでも想像を絶する
驚異的な射撃管制能力だったが、打ち抜かれたその場所も、艦体構
造上、すべての力学的テンションが収束する結節点だった。

破損した子気囊の数々から大量の浮力ガスが漏出して、急速に高
度を落とし始める。

同時に艦体そのものが内側に向かって雪崩を打って崩れ始める。
艦を形成する構造材そのものが鋭利な凶器と化して、艦体をずたず
たに引き裂き始めた。

『サテライト 攻撃衛星』

ホログラフィー 立体映像の消えた艦橋に、 ブリッジ ロアン・ロイの冷たい嗤みを含んだ声

が流れる。

『来るべきあの男との戦いに備え、使える物は何でも使っていていい、と、ご老人方からお許しを得てますので。ちょっと試しに使ってみました』

「ロアン・ロイ！」

クロエが瞳を朱く輝かせる　　が、不意に痛みを感じたように顔を顰めた。

『無駄ですよ。この回線は「マスターピース原器」の通信衛星を介してます。貴女と「ヒツツ棺」の能力をもつてしても、簡単には突破できません』

ブリッジ艦橋の床が傾き始める。艦体の上げる悲鳴のような軋み音が、あちこちから聴こえてくる。

『貴女がこれくらいでくだばるとは思ってたませんけどね。まあ、今夜のところはこの辺で。』

では、いずれまたお会いしましょう、クロエ女史』
回線が切れる気配に、クロエは舌打ちする。

だが、今はそれどころではない。一刻も早くこの艦から脱出しなれば。

しかし、どうやって？

気密ハッチを蹴破って艦外に顔を突き出したクロエは、氷点下の暴風に目を細めつつ、艦の状況を素早く確認する。

機体の空力特性で浮かんでいる飛行機と違い、飛行船の場合、浮力が残っている限り「墜落」はない。浮力ガスの漏出は進んでいるが、いきなり墜落するような事態にはならないだろう。だが、破損した構造材を大量に撒き散らしながら進む艦体の方は、すべての浮力ガスを失って地上に墮ちるより先に持たなくなる。

視線を周囲に転じる。青白い月光を孕んだ闇は深く、どこにも逃げ場はなさそうだ。

クロエは視界を熱分布画像モードに切り替えた。

眼下に遠く、小さな熱源が見える　アリーズ！

「少佐！」

「少佐！　出なさい、少佐！」

アリーズ　船内で カテドラル 大聖堂 の兵士たちに向けて自動小銃をぶっ放していた少佐は、偉そうにかなり立てる腰の無線機を手を取った。クロエに持たされた カテドラル 大聖堂 の無線機だ。

少佐は苦い表情で送信ボタン（プレストーク・スイッチ）を押して応えた。

「何か用か？」

「そっちの状況はどうなってるの？」

「予定通り浮力調整室は押さえた。既に高度は下げ始めている。ただ、ここを奪還しようと思いが押し寄せてきてるので、そいつを今、船内で募った乗客たちと防戦して　」

「そこから　アリーズ　の操舵は可能？」

こちらの説明を途中で断ち切られた少佐は不快気に眉を顰めつつ、

浮力調整室の室内で機材を操作している軍曹に話を振った。

「多少は。ただ推進機を潰されてますから、あくまで操舵だけです。視界も効きませんから、計器操舵に限られます」

「だ、そうだが？」

『充分よ。これからあたしの言うとおりに操舵してちょうだい』

「お前、それ以前に今どこにいるんだ？」

『その内、気が向いたら話すわ』

「……手前え……」

『いいから、さっさと言う通りになさい！』

気密ハッチから身を乗り出したクロエは、そのまま頭から夜空に飛び込んだ。

頭部を下にそのまま自由落下　その姿勢で、数百の高度を一気に降下すると、そこからは手足を広げ、空気抵抗で落下速度と方角を調整する。

ちっぽけだった　アリーズ　の姿が、ぐんぐん大きくなってゆく。超高度の凍てついた大気を引き裂いて、クロエの身体は落下してゆく。

やがて二、〇〇〇を越す高度を降下し、狙い通り　アリーズ　の天井に到着　派手な衝突音とともに、気嚢部天井外壁の高張鋼板に身体を埋めてクロエは落下を終えた。

「……………」
アリーズ　の天井に大の字になってその身を埋めたまま、クロエは天を仰いだ。

降るような満天の星々が、揺らぐ大気越しにきらめいて輝く。駆逐艦からは距離的にずいぶん離れたこともあり、もうここからは見ることはできない。あるいはもう空中分解してしまったか。

クロエはそのまま瞳を閉じ、深く息をつく、眠るように　アリ

―ズ にその身をゆだねた。

『で、結局、どうなったんです？』

「何とか地上おかに降りれたから、こうして連絡取ってるんだろが」
アリーズ 船内からかき集めた機材で急拵えの通信機をでっ上げた少佐は、アリーズの残骸の片隅に即席の通信室を設け、さつそく6課に連絡を取って状況報告を行った。

とはいえ、大聖堂カテドラルだの、全身機人の少女だの、「棺ひつぎ」だのという話は触れていない。アリーズがテロリストに襲われたということと、博士が死んだという事実のみだ。さすがにそのぐらいの分別はあるというより、説明のしようがないので諦めたと言わべきか。目の前で起きた現実^{現実}は現実として受け留めるにやぶさかではないが、こんな素っ頓狂な話をいきなり正規の報告ルートに載せる度胸はない。

まあ、この件は將軍オヤジに直接話しかねえか……。

「で、將軍オヤジは？」

『特務本部長のつきそいで、空軍さんとの緊急会議に出ています。結構、大事になってますよ。帝都 周辺の師団には黄色警報コンティジョン・イエローが出来ますし』

「クーデター並かよ……まあ、多分に空軍に対するはったりなんだろうが」

『そうそう、後で揉める元だから、空軍と鉢合わせする前にとつとと姿消しとけて伝言が』

「……そうかい。そりやまた、ご心配どうもって返しといてくれ」
チュン・二伍長との通話を終え、受話器をホルダーに戻して少佐は立ち上がった。

船上でクロエと別れた少佐は、当初の作戦案に戻って浮力調整室

を目指した。

途中で捕らえられた乗客を救出し、そこから従軍経験のある男性を中心に部隊を編成した。残念ながら現役の軍人はほとんどいなかったが、戦後まだ五年ということもあり、すぐに三〇人ほどの参加ボラ者ボランティアが集まった。彼等に敵から奪った武器などを配り、反撃を開始する。

そこから先も決して容易に進んだわけではなく、少なからず犠牲も払いつつ、それでもようやく浮力調整室を制圧し、浮力ガスの放出を開始。高度を落しはじめた矢先、クロエから入った無線が「針路を変える」というものだった。

何が何やらよく判らないまま、言われるままに針路を変更したものの、それつきり何の連絡もない。こちらから何度も呼び出したものの、返事も無い。いい加減バカらしくなり、戦闘の中で無線機自体どこかにやってしまった。

一方、敵の攻撃は、ある時点でいきなり止んだ。

何かと違って確かめると、敵の兵士達は全員その場で絶命していた。自決したというより、体内に埋め込ま（インプラントさ）れた毒物に命を奪われたらしい。自らも特殊作戦任務のために何度も部隊編成を手掛けたことがあるだけに、これだけの規模と練度の部隊を編成するためのどれだけのエネルギーと時間が必要か、容易に見当がつく。それを平然と使い捨てることのできる組織の凍てついた意志と思考に、少佐は戦慄した。

それからは、恐れていた船外からの攻撃もなく、アリーズは順調に高度を下げ、無事に地上までたどり着くことができたのだ。た。

とはいえ、アリーズの降りた場所は見渡す限り何もない荒野のど真ん中で、すぐには救援部隊もやって来なかった。

脚の速さなら空軍の空中艦隊が一番乗りをしそうなものだったが、

アリーズ を失跡ロストしたまま到着まで捕捉できなかつたらしく、未だに姿も見せない。

もつとも、だからと言ってこつちも暇なわけではない。怪我をした乗員乗客の手当てや、春先とはいえまだ肌寒い気温の下で夜を過ごさねばならない乗客のために暖や食事を取らせる手配など、災害救難活動としてやるべき作業は山ほどある。

それらの作業を軍曹や志願者達ボランティアに任せ、その合間に通信機材をやり繰りして何とか6課と連絡を付けるところまで漕ぎつけた。ついでに地元の陸軍部隊に アリーズ の到着地点を通報すると、既に搜索部隊を編成して辺りを探し廻っているという。ほどなく先行する斥候部隊が到着するだろう。

仮設通信室を出た少佐は、久しぶりの地面の感触を足の裏で確かめながら、胸元からシガレットケースを取り出し、一本くわえると軍用ライターで火を付けた。今度こそ誰憚はばかることなく、胸の奥まで紫煙を吸い込んで、夜明け前の青味を帯びた夜空を見上げる。

爆音とともに上空を単発のプロペラ機が通過する。先ほどの通信を傍受した、空軍の艦載偵察機か。別に空軍そらからには連絡は入れてなかったが、空中艦隊からの救援部隊も遠からず到着するだろう。

となると、長居は無用か……。

こんな大事件に陸軍の特務機関員が関与していたとなれば、痛くもない肚はらを探られかねない。実際、大規模なテロや軍事的事件には、あらかじめ何らかの兆候がかなり早い段階で得られたり、あるいは常日頃から運用されている諜報ネットワークのすぐそばで発生することが少なくない。そのため、必然的に特務機関員の姿が事件の周囲でちらつくことも珍しくなく、事件後の捜査や報道機関の調査などでその存在が露見することもある。「諜報ちほう」の業界人の感覚としては「いて当然。むしろいない方が不自然」なのだが、世間一般はそうは捉えない。特務機関員の存在は、それだけで事件そのものを彼らによる自作自演の謀略と決めつけてしまいがちになる。人間は唐突で不条理な「悲劇」より、人為的謀略による「悲劇」とでも言

った方がまだしも受け留めやすいからだ。

勿論、空軍でも同業者ならその辺の事情も理解してもらえるはずだが、陸軍対空軍という巨大な官僚機構の間の対立構造下では話はまた別になる。「事実」がどうであろうとどうでもいいのだ。対外的に公表して相手の「失点」になりそうなら、何でも利用するそれだけの話だ。

だから、少佐や軍曹の身柄を先に空軍に押さえられてしまえば、どんな言いがかりをつけられてしまつか知れたものではなかった。将軍が「空軍と鉢合わせする前に姿を隠せ」と命じたのはそのためだ。まあ、カテドラル大聖堂 だの何だのと言った子供の妄想染みた「世界の真実」よりは、そっちの方がよほど説得力があるのは如何ともしがたかった。

そこまで考え、少佐は苦笑した。

懐かしき世界へようこそ 複雑な政治的駆け引きが錯綜するこんな謀略戦の世界こそ、自分が本来足を付けていた「地面」だった。だが、それは市井の人々の暮らしからは、実にどうでもいい話でもある。陸軍が勝とうが、空軍が勝とうが、日々の暮らしに直結して市場のジャガイモの価格が左右されるわけでもない。その意味で、少佐や軍曹達の生きる世界の「現実」も、クロエの口にする「世界の真実」も、等しく「妄想」扱いされてもおかしくないのだ。

だとすると、結局は本人がどの「地面」に立って生きねばならないか、という見極めの問題なのか。

少佐は苦く眉を寄せた。

何かいまだに足許が揺れているようで、心許ない。きっと長く「地面」に足を付けていなかったせいだ。

きっとそうだ。畜生。

少佐の思考は、不意に聴こえてきたクラクションによって破られた。

見れば、軍用ヴィーグルが一台、目の前に停まっている。その後方に接続されているのは、砲架運搬用の台車。その上に載る白い棺ひつぎを見て、くわえた煙草をぼとりと地面に落とす。急速に沸き起る嫌な予感に、少佐はそのまま背を向けて逃げ出したくなった。

「少佐」

運転席から軍曹が声を掛けてきた。

「軍曹、この車は何だ？」

「地元の連隊の斥候部隊が到着したんで、事情を話して借り受けました。空軍が到着する前にこの場を離れねばなりません」

「それはいい。俺が訊きたいのは、後ろの台車の載ってるこいつは何だって話だ」

「『棺かひつぎ』よ。見れば判るでしょ」

澄ました声で告げる後部座席の声の主を、少佐は睨みつけた。

「おい、お前はそこで何をしてるんだ？」

「いちいち口で説明しないと理解できないの？」

怯むことなく視線を返すクロ工は、いつの間にか再び少女の姿に戻っており、しかもこれもどこでどう見つけてきたのか、初めて会ったときと同じような黒いドレス姿。髪の両のおさげもしっかりリボンで結んでいる。まるで何事もなかったかのような面構えで、後部シートを独り占めにして座っていた。

「あえてご説明願おうか。まずお前、今までどこで何をやってたんだ？」

「大聖堂カテドラルの装甲ジャイロを撃墜して、駆逐艦デストロイヤーを一隻、沈めて戻ってきたわ」

「まさか」

「信じる信じないはそっちの勝手よ。でも、あんた達がそうして地面に足を付けていられるのがすべて偶然だってわけでもないことぐらい、理解できるはずよ」

確かに高度を下げるアリーズに対して、船外からの攻撃がなかったのは不思議に感じてはいた。にわかには信じがたいが、しか

し、あの「棺」^{かひつ}を身につけたクロエならありえなくもない気がする。「……まあ、いい。で、今はそこで何をしてるんだ？」

「あたしはこれから、西方辺境領の奥深くまで行かなくちゃならない」

「へえ、そうかい。それで？」

「あんた達も付いてきていいわよ」

「……………」

一瞬、怒りで目眩がしそうになるのを何とか踏み留まる。

「何で、俺たちがそんなものに付き合わなきゃならんだ!？」

「ふうん、それじゃ知りたくはないのね？」

「何をだ？」

「世界の真実」

さらりとクロエが言っただけのける。

「くだらねえ」少佐はあっさり否定した。

「そいつはお前の『真実』ってだけで、俺達のじゃねえ。そんなものにつきあわなきゃならん謂われはない」

「でも、あんた達は現に ^{カテドラル}大聖堂 の兵士たちと戦火を交えた。博士を始めとして、命を落とした乗員や乗客もいる。それも全部、夢だったとでも？」

「かもしれないな」

「ずいぶんと便利な『現実』に生きてるのね。でも、目の前で起こった出来事から目を逸らさなきゃ整合性の取れない『現実』なんて、そんなものにどんな意味があるのかしら？」

「……………」

クロエの問いに、少佐は言葉を詰まらせた。

クロエの主張を認めただけではない。「現実」に意味なんか必要ない。重要なのは、自分が生きてゆくためにどちらがよりしっかりと踏み固められた「地面」なのか、だ。自分の存在を預けるに足る強度があり、そこに納得できているなら、どんな世界だって、それがそいつにとっての「真実」であり「現実」だ。

だが、俺は「納得」できているのか？

この「真実」に？ この「現実」に？

胸にぼつかりと空いた黒い大穴を眺めながら、自動装置と化して任務をこなしつつ「現実」を漂流する自分は、その強度を「現実」に感じられなくなってしまったからこそ漂流を続けているのではないのか？

ならば、俺は

「……ひとつだけ訊きたい」少佐はクロエに訊ねた。

「その子供の成りで旅を続けられないから、っていうお前の手前勝手窮まる都合は判る。だが、何故俺たちなんだ？ 他に大人なら誰だっていいはずだ」

「そうね。……誰かに見届けて欲しいのかもね。それも関係のない、あなたのような第三者の視点で」

「見届ける？ 何を？」

「私たちが、生きて、闘ったこと、すべてを」

強い意志のこもった瞳で、クロエは少佐をまっすぐに見据える。

その射抜くような鋭さと熱量を秘めた視線に、少佐は敗北を悟った。

ああ、そうか。この瞳だ。

こいつも相応の地獄を目の当たりにし、冷たい機械の身体の中に押し込められ、自ら罪にまみれてここに在る。にも関わらず、なおも「人間」であることを主張し続けるこの理不尽窮まりない瞳の輝きが、この先どうなっただけゆくのかを、確かに見届けたと感じている自分がいた。

「……勝手な奴だな」苦笑しつつ軍曹に訊ねる。

「軍曹、お前は どうする？」

「私は少佐にお供します」

「なるほど」

少佐は頷き、軍用ヴィーグルの助手席に乗り込んだ。

空は既に黎明を過ぎ、東から急速に蒼く染め上げられてゆく。そ

の一方で、西の空には今なお深い夜の闇が残り、その両者のせめぎ合いが鮮やかなグラディエーションとなって空を覆っている。

「で、どこへ行けばいいんだ、お嬢さん」

「勿論」後部座席でクロエはくすりと笑って告げた。

「西へ(Go West)」

Fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2433m/>

棺のクロエ2 超高度漂流

2010年10月8日14時32分発行